

ホワイト・エンゲージ

リファ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

注意!!こちらはポケモンの擬人化小説となります!

擬人化や、それに付随するオリジナル設定等に対して嫌悪感を覚える方は閲覧をお控えいただくようにお願い致します。

とある町、人々が豊かに暮らす街で一人：何かに苦しむ若者がいた
それはなぜなのか？

偶然のものなのか？

なにかが、動き始める

目
次

第1話	第2話	第3話	第4話	第5話	第6話	第7話	第8話	第9話	第10話	第11話	第12話	第13話	第14話	第15話	第16話	第17話	第18話	第19話	第20話	第21話	第22話
1	8	13	17	21	29	35	40	50	57	66	72	80	85	94	108	118	125	136	142	152	164

第1話

この世界にある、どこかの街――

日を重ねるごとにその街は暑くなり、人々は外に出たがらなくなる。

しかしそれでは生活もできない、仕事をするものにとつては外に出ることが自身の生活の基盤であると知っているから。

暑い日差しの中で体から汗を流し、交差点を何十ものひとびとが行き交う。

その中に、彼がいた

気温が35を越える中で長袖のパーカーを着用し、黒いスラツとしたジーパンを履いた男性はこの真夏の太陽が照らす中でフードを被りうつ向きながら歩いていた。

白髪にメッショのような赤い色が前髪の一部に混じった髪が、じりじりと太陽の光に照らされ熱を帯びる。

「……」

フウ、と大きく交差点の真ん中でため息をひとつ…不意にそこで立ち止まり彼は天を仰ぐように、空を見上げた。

「今日…は、暑いな」
長袖を肘の位置までまくり、額や目の回りについた汗を腕で荒々しく拭き取る。

その時、彼は前を見てはいなかつた。

ドンツ

「うわっ」

「つてえな…クソが」

白髪の彼にぶつかつたヤンキーのような青年が、暴言をボソリと吐き睨み付けるようにこちらを見る。

フードで顔を隠したままの彼は、そのまま立ち去ろうとした。

「おいこら兄ちゃんよ…ぶつかつておいて、ごめんなさいも無しか？ オラ…」

食つて掛かり、胸ぐらをグイッと掴み白髪の彼を交差点のど真ん中で挑発する。

フードがバサリと頭から取れて、彼の顔が光の下に露となる。

「…」

「なんだ？なんか言えやコラアツ!!」

ヤンキーの風貌をした輩はその場で突き飛ばし、白髪の彼は抵抗もせずに流れるようにして倒れた。

ピシッ

「…！」

その直後、白髪の彼が頭を抱え始め…激痛に悶えるようにその場で体を激しく動かし始める。

倒れた際に頭をぶつけたにしては…過剰な反応だ。

「おいおい、しょーもねえ演技はやめろや…」

ヤンキー風貌の彼が近寄ろうとしたとき、今度は白髪の彼が強い力でドンツと突き飛ばす。

本気、全力で突き飛ばしたからかヤンキー風貌の彼は交差点のど真ん中から歩道近くまでぶつ飛ぶ。

「ひ……うあ……」

そのまま、ヤンキーのような青年が起き上がるのを待たずに白髪の彼は走つてその場から立ち去つた…

俺は・・・誰だ？

気がついたとき、俺はある部屋のベッドで横になっていた。
ジーンズもシャツも、何日着たままになつてているのかわからぬ…
皺だらけの服を脱ぎ捨て、近くのタンスから新しい服を漁る。

蒸し暑い部屋の中で探したが、残念ながら半袖の服はもうないようだつた。

よくあたりを見てみれば洗濯物が山積みになつていて、俺自身がズボラなのか、それとも別の理由があるのか

それさえも思い出せない、二日酔いとかそういう類のものじやなく完全に自分のことがすっぽりと抜け落ちている…今までにない感覚。名前すらも思い出せない

俺は誰だ？

ここはどこだ？

「…外に出れば、なにか…わかるだろ」

自分にそう言い聞かせる、自信のない言葉を頭の中で反芻させて一縷の希望に自分の記憶の回復を託して…

俺は玄関のドアを開けた。

「はあつ…う…あ…！」

昼をとうに過ぎてから、俺はあの交差点から帰宅した。

あのヤンキーのような男は追ってきてはいない、めちゃくちやな息継ぎをしながら俺は念の為に玄関口の鍵を閉める。

ガチャリと無機質で冷たい音が響く。

その音に合わせるかのように、頭の中でズキンと痛みが襲う。

「ぐ・あ・・つ!?

正確にはズキンといった表現は違うかも知れない、まるで頭を鈍器でぶつ叩かれたようなひどい痛みが継続して2回3回と痛みがはじけて、気を強く持つていないと意識が飛びそうになつた。

痛みを気にしていたために、俺は足元の洗濯物に足を取られて転倒する。

「つ!」

咄嗟に腕を床につけて、どこも打ち付けなかつた。

しかしその際に部屋のテーブルの下に、ぐしゃぐしゃになつている大学ノートを見つける。

ノートをまるごとぐしゃぐしゃにしているのが気になり、俺は痛みをこらえながらそのノートに手を伸ばした。

「俺の字・・か?」

表紙には何も書かれていない、俺はしゃがむ体勢をとつてボロボロなノートをパラパラとめくつてみた。

中は日記のようだが、ただの日記ではなく・・俺が記憶を失い始めてからのもののがうだつた。

気になる点だけ、読んでみた。

某月某日 天候晴れ

最近、物忘れがひどくなつてきた。

自分が何をしに部屋に来たとか、何をとりたくて冷蔵庫やら茶棚を開けたのかわからなくなる。

まだ物忘れの激しくなる年でもないと思いつつ、心配なので今日から日記をつけることにした、ひどくならぬうちに手を打つのが一番だろうから。

某月某日 天候曇り

日記をつけ始めてもうだいぶ経つ…しかし、予防になるかと思いきや状態は悪化していく。

たまに友人の顔や名前が思い出せなくなり、何度も携帯のアドレス帳や写真を見直したのかわからない…俺はいつたいどうなつてしまつたんだろうか？

あと、少し前から偏頭痛がする…こんど病院に見てもらおうかな。

某月某日

わからない

自分が、今まで何してた？この日記を見て初めて知ったことばかりで

友人の名前は、顔は…わからない、自分のことなんて名前しか思い出せない…助けて

頭痛もひどい、まるで自分の死期が近いみたいに日に日に大きくなつてる気がする。

これ以上強くなつたら俺はもう

日記はここで途切れている…

「なんだよこれ…」

自分が日記をつけていたことも、俺は全然記憶になかった。

カレンダーと日記の最後に日付を見るに最後のページが書かれたのは既に1週間以上前になつていて、日記をつけ始めてから考えればもうひと月も前だ。

「おれ、こんな日記……を……」

その時、視界がぐらりと歪む
歪みを認識したかわからないうちに、落ち着いていた頭痛が再び激しくなる。

「あがつ…!?

今度の痛みはもう先ほどとは比べ物にならない激痛、鈍器で殴られているというよりも中からコワサレテいるような、もう、考えがまとまらなくなる。

日記に書いていた偏頭痛はどうやらもう、おれのからだを壊すつもりのようだ。

「…・・・!!」

痛みが苦しすぎて、声がデナイ
それよりも痛い、イタイ、イタイ
クルシイ
タスケテ

何も動かせない、体はもう、痛みで、止まって、動かせなくて

「ハツ・・・あ・・・・」

死ぬのか

俺は

もう

そして

わけがわからないうちに

俺の意識は闇にとけていった。

第2話

(…あれ…?)

自分の体が冷たくなるような錯覚、目をつぶつたままで…
自分の心臓の音も、わからなくなっていた。

意識はあるのかわからない、生きているのか？死んでいるのか？
心臓の音は聞こえないんじやなく：止まっている？

(そう、か…死んだのか…)

何も思い出せないまま、名前も、友人の顔も、両親の顔も…
無になつて、何もないまま消えていくのかと思うとひどく寂しさを
覚える。

(…誰か…)

(誰か…助けてくれ…)

寂しさから、もう誰にも会えないのだと思うとひどく悲しくなり
俺は誰かに助けを求めた、遅すぎたということは分かつていて、も
う：だれも助けては

ポウ

(・・?)

背中のあたりからだろうか？温もりを感じた

冷たい感覚になれた俺の背中がとろけるかのように、俺の背後から温かみを感じる。

やがてその温かな感覚は、体全体を包みこんでいく…まるで、なにかに抱かれているような…大きななにかに、抱かれているような…そんな

「…」

そこで、パチリと俺の両目が開く。

長いこと見ていなかつたような気のする、先ほどの部屋の風景が眼前に広がっていた。

先程までの冷たい感覚はもうなくなつていて、左胸あたりからは心臓が鼓動する音も聞こえる。

頭痛も跡形もなく、治まつていた。

「生きてる…？」

既に太陽の光の差し込まない部屋、時計を見れば時間は既に深夜になつている…相当気絶していたらしい。

俺はとりあえず風に当たりたくなり、部屋から出てみようと体を起こそうとする…と

「あ、ストップです！もうしばらくそのままで！」

「うおっ!?」

後ろから不意に大声を出されて、動き出してほつとしてた心臓が飛び出るかと思うくらいびつくりした。

座り込んだ体勢のまま体をひねって後ろを見てみると、そこには人の女の人が立っていた。

「あ、驚かせてごめんなさい！」

まだ症状が落ち着いたばかりなので、もう少しゆつくりしててくださいね」

笑顔を見せながらそう言つた彼女の手には、大量の洗濯物が積まれている。

全く見覚えのない女性・・まあ、何も思い出せない俺にとつてはそんな事関係ないな、と自分の心の中で納得させる。

「えつと・・?」

とはいえ部屋の中に急に現れた彼女に動搖を隠せず、しどろもどろになる。

緑色の髪の彼女はクスリと微笑みながら、洗濯物を一旦置いてから俺のそばで腰を下ろして同じ視点の高さになつてから口を開く。

「わたしは研究員のファリニースといいます、あなたの名前は?」

「俺は、セグレト・・?」

とつさの自己紹介に、俺は自分の名前を言つて返した。

・・・自分の、名前?

「……そうだ、俺の名前はセグレト……！ そうだよ！ 俺は、セグレトだ！」

今まで思い出せなかつた自分の名前が、スラリと自分の口から出た。

それだけじゃない……親の顔も名前も、友人の顔も、こここの家の住所も仕事のことも！

全部、思い出せた！ 日記に書いてあるすべてのことを、俺は思い出した！

「ふう……よかつた、うまくいったみたいで」

ホツと大きな胸をなでおろす彼女の手には、なにかの光が点つているように見えた。

その光は温かみのありそうな穏やかに淡いグリーン色で、その光に俺は見覚えがある。

「記憶と頭痛が戻つたのは、君のおかげ……なのか？」

「はい、とても危ない状況でしたけど……なんとか」

その後は、なにか記憶に引っかかることがありますか？ 体の調子、おもに頭痛とかはどうですか？ と様々な質問をされたがどこにも異常はない、記憶も全て思い出せると答えると、彼女は満足気な顔を見せた。

「君は、研究員……つていつたつけ」

「正確にはまだタマゴなんですけれど……そう名乗つてます。」

「あ、職業詐称なんておもつちゃだめですかね？」

「俺からすれば、研究員というよりも医者つて感じだよ」

「ふふつ・・ そうかもしれないですね」

お互いの目を見て、会話をしばらく続ける

その間に本当にどこにも異常がないのかみてたのかかもしれないが、しばらく会話を続けた後、コホンと咳払いをしてからファリニスは真面目な顔をしてこちらの顔を見た。

「あなたの記憶喪失と偏頭痛のこと・・ 原因は、タダの病気ではないです。」

「・・・！」

今まで、原因不明だった偏頭痛と記憶喪失

研究員と名乗ったファリニスが原因を知っている、しかもタダの病気じやないときた。

俺は自分の身に起きた出来事の真相を知りたい、何が起こつたのか？きつかけを・・・ 理解したかった。

「・・聞かせてくれ」

ファリニスはコクンと頷いてから、口を開きこういった。

「思念の力、です」

第3話

「思念？」

「はい、正確には残留思念といいます」

残留思念…現実離れしたその言葉は俺の体に馴染みにくく感じた。ファンタジー やサスペンス の、あくまでも創作物にしか現れないような単語は現実味を帯びない…しかし、俺は〈現実離れ〉のした経験をついさつきまでしていた。

「…思念つて…あの、心みたいな…？」

思念という単語が聞きなれないため、俺はぼんやりとしたイメージでファリニスに聞いてみた。

「独創的な世界の話だとそういうことになります、そして思念論のかでもそんな認識で大丈夫ですね」

細かい言葉の意味を知らないが…同じく意味が通るのならそれでいいか、と俺は納得して座り直す。

「思念論の中で言う〈思念〉とは、人などの生命を持つものすべてに存在している意識のようなものです」

「意識…か」

「はい、学術的に生きているもの…動物はもちろんのこと植物や岩などの動きを見せない者達も含まれており、大なり小なりの思念を彼らは持っている…これは、思念論の基礎とも言えます。」

要は、どんな物も思念を少なからず持っているということです……と
ファリニスは簡潔に後で締める。

そしてから、ファリニスは続けて話す。

「思念は生命体が生きている限りは活動をし続けます、人や動物であれば脳と呼ばれる場所にその思念を宿して……無機物的な者たちであれば、またどこか別の場所に、です。

しかし、この思念はとあるきっかけで体から離れます……そのきっかけがなにか…わかりますか？」

ファリニスは、俺に答えを求め問い合わせる。

思念は生命体があるかぎり、その活動を止めない……まあ俺たちがこうして会話できる以上当たり前だよな、生きてる証拠ってことか…：

生きてる…？

「きつかけは…生命体が、死ぬこと？」

「くんと、彼女は頭を頷かせる。

「そうなんです、生命体の活動の停止…つまり死亡すると思念は人で言う脳の部分から離れて、体から放出されるんです。

何らかの事情があつて体から思念が放出されることを、思念論の中では＜乖離＞と読んでいます。」

難しい…と、顔をしかめたまま俺はテーブルに目を落とす。

すると、いつのまにか…ほんとうに気がつかないうちに、紅茶が注いであつた。

「お…お？ いつの間に…」

「ふふつ、その紅茶は飲んでもらつていいですよ。小難しい話をしても頭がパンクしちゃいますから…ちょっと休憩しましようか。」

「ああ…助かる、いやわりと本氣で…」

空っぽの頭のなかに知識と記憶が入り交じつてへんなのが生まれそうだつた…ここは、ファリニスの提案を迷わず受けた。

若干レモンの香りのする紅茶を一口含み、何気なしに辺りの引き出しを開けたりもしてみる。

(うわあ…引き出しの中ぐつちやぐぢや、記憶ないうちにやたらめつたら荒らしたつけな…)

少しだけ行動を後悔する、もしくは少しでも早くファリニスに会えていればと運命をちよつとばかり呪う…ほんとに、ほんのちよつと。

「あんなことがなけりや、今頃はゆつたりとしたつきでも眺めて」

窓から見えた月を一瞥してそう呟いただけ

青の夜空と濃度のある黒の雲に映えた月が見えただけ

月のすぐ横に、窓のすぐそばに

月と同じ金色の目のなにかが
怪しく蠢いた。

第4話

窓からの異様な光景を認識した瞬間に、窓が一瞬にして硬い金属の縁部分ごと碎かれ破片が室内に飛び散る。

それと同時に、蠢いていたなにか得たいの知れないモノが部屋の中へズルリとはいってきた。

「うわああああつ!?」

悲鳴をあげながらも窓から遠退き、その物体を直視してしまう。ぐにやぐにやというか、ブニブニというか…形容しがたいその外見をしたそいつは金色の瞳のようなものでこちらを見つけると、じつと見るようく細くした…その後

見た目から想像もつかないほどのスピードで、こちらに突進してきた。

「つ！」

ハツと息をのみ咄嗟に台所の方へ動く。

慌てて転倒しかけるも、それが功をこうしたのかギリギリで突進の回避に成功する。

自身が転倒しかけたこと、いきなりの状況で頭がパニックになってしまう。

「な…なんだつてんだよ…！」

体が動かない…

やばい…

金色の瞳が2つこちらを見る、獲物をとらえたかのような鋭く…本能の目

言葉を使わずに、そいつは目で俺に囁いたような気がした。

「……で殺す」 と

「くつ…!?

目をつぶり俺は覚悟をした、死ぬ覚悟だ
たがそれは次の目の前を光景を目にし、安堵へと変わる。
さつきまで目の前で獲物を見据えていた金色の目は閉じ、形容しが
たい外見をした物体が2 mほど奥に飛んでいた。

「大丈夫ですかっ、セグレトさん!?

後ろからファリニスの声がした、先程まで聞きなれていた小難しい
声。

「えつと…ありがとう、ファリニス」

「いえ…しかし」

ファリニスは倒れたままの謎の物体をみつめる、金色の瞳は未だに
閉じたままだ…起き上がる様子もない。

「…やつぱり…でも…おかしい…」

得たいの知れないモノには触れずに、近くで覗きこむように観察を
始め…ぶつぶつと言いながらも険しい顔のまま落ち着く様子がな

い。

「ファリニス？えつと…こいつは、一体？」

俺の声にハツとして、ファリニスこちらにふりかえる

「あっ、いえ！なんでもないですよ、この後処理は私がやつておきますので！セグレトさんは…えつと、トイレにでも!!ささ、どうぞ！」

「へつ!?いや、あの、別に催してはいないぞ!？」

その時視界の片隅、台所のシンクの方にまたなにかがうごめく。

同じ、金色の瞳が2つ見える

「ファリニ…」

「離れてつ！」

俺が呼ぶよりも前にファリニスは既に動いていた、しかしそれは金色の瞳も同じくであり既に俺に向かつてまた突進を繰り出す。

「させませんっ！」

突進してくる金色の瞳と、俺の間にファリニスが立ち入り謎の物体を迎える。撃つ。

その刹那にファリニスの手のひらにあつた淡い緑色の輝きが…その眩しさを増す。

やがてそれは小さな塊に、グリーンから紫色に変化し、球状に形を変えて発現する。

「〈ねんりき〉っ！」

パシーンツと軽いような音が響き、金色の瞳は台所の奥へと消えていく。

ガシャンとなにかが壊れた音が盛大に響くが、暗がりでなにがかまではわからない。

「セグレトさん！…こは危ないです、外へ！」

「えつ、あ、お、おう！」

慌てた様子のファリニスに提案され…

バーンツと扉を勢いよく開けて、俺たちは部屋をあとにした。

第5話

「ヽヽヽ…まで、来れば…ひとまずは…」

夜の町、俺たちは裏路地を通つていた。

家からものすごい勢いで飛び出したすぐあとに、再びいえの中から
なにかが割れた音が聞こえたあたり…また、奴がでたのか？

状況の整理が頭の中でできていない、呼吸を落ち着かせ…俺はひと
まずフアリニスの方へ向き直す。

「なあ、あいつらは一体なんなんだよ！急に俺の…命を狙つてるみた
いに…襲つてきたぞ！」

「…命を狙つてる…それは間違いないです」

「セグレトさんが命を狙われていたのは、今から1ヶ月以上まえにな
ります…ずっと、狙われてたんですよ」

「なつ…!?」

俺は信じられなかつた

記憶は既にもう完全に戻つてゐる、なのに…あんなに殺氣にまみれ
た奴等を俺は当然のことく知らない。

「そんな…でもつ、俺はあんな奴等しらないぞ!?」

「わからなくて当然なんです、あいつらは決して表に出てこない存在…目で見ることすらできないハズなんです。」

「目で、見えない…？それって」

さつき聞いたようなことだ

目に見えないなにか、それをファリニスの口から…

「はい、あれは思念…正確には思念だったもの…です」

「あれが…？」

禍々しく殺氣を放つ、金色の瞳…あれが思念？あんなのが、俺たちの中に同じく入つてるもの？

とても信じられなかつた、思念が、俺たちと同じような思念が、なんで人に牙をむくんだ？

「乖離のことは先程お話ししましたよね…生命体が活動を停止した際に、思念がからだから離れる現象」

「ああ…さつき聞いた」

「呼吸おいてから、ファリニスは続ける

「乖離した思念は通常、この星の内部に埋まり次なる生命体に思念を宿すためにその一切の記憶を浄化してから次の生命体に宿します。」

「浄化…消去するつてことか？」

「はい、消去しなければ次の生命体の活動に影響を及ぼしてしまうので…極稀に、消去されない」ともあるらしいのですが…」

輪廻転生…オカルトまがいな話だけど、本当にあるのか？

「しかし、またこれも稀に思念が地面に還らずに空気中で浮遊してしまうことがあるらしいのです。これを〈待機滞留〉と言うのですが…」

「えつと…それがなると、ああいう化け物になるのか…？」

錯乱しかけた頭でなんとか理解しようとすると、口頭での説明での理解は難しい：頭の回転が遅いのも、呪いたくなるな

「正確には、その思念が集まつた場合にです…あのように集合した姿を思念論において、〈思念集合体〉と呼びます」

殺意を剥き出しに、襲いかかってくる思念集合体…か
でもまてよ…

「その思念集合体は…なんで、俺を襲うんだ？その、肉食とか…なのか
？」

やつに噛みちぎられるとか…そういう考えは持ちたくもないけど、
聞いておかなければ気がすまない…

「いえ、あれは普通の食料はいりません…思念ですから、消化器もなに
もありませんから」

「ふ、普通の…？」

「他者の思念が、奴等の活動源…その方法は精神の搾取…搾り取るよ
うに、セグレトさんのように…殺しながら」

背中が寒気を覚えて、ゾクツとした

「俺、みたいに…？」

「奴等の目的は獲物の記憶…セグレトさんの記憶を封印して、無理やり頭の中の思念を榨り取り…活動源にしていました」

記憶がなくなっていたと思っていたのは…奴等の仕業だつたのか、脳裏に封印されて、俺は奴等に思念を貪られてた…?

「…その…思念は…俺のなくなつた思念は?」

「それはもう大丈夫です、セグレトさんが元々持つていた思念とはまた別の思念を使って、なくなつた部分の補完には成功していますので」

「それなら、記憶も食われちゃつたんだろ!?俺の記憶は戻つてるぞ!」

思念と記憶は繋がつてゐる、なら食われた部分の思念と繋がつてた記憶もなくなつちやうんじや…と、俺は考えたが

「記憶は思念にすべて宿つてゐるわけではないです、脳自体にも記憶を管理する場所はあります…そこから抽出して、新しくいれた思念に流し込みました」

「そ、そつか…なら、よかつた」

ガシャン！

「!?

遠くの方から、微かに聞こえた・窓ガラスの割れる音。間違いはなかつた、方向からするに俺の部屋からだ。

「こつちに…くるのか!?」

「…つ」

正直、生きた心地はしない：奴等は影に紛れて近寄る。

窓から見えたのをたまたま見ていいなれば、奴等の奇襲であつとう間に死んでいたのかもしれない：

怖い

殺される…？

怖い：

怖い：

死にたくない…死にたく

「セグレトさん、これを」

「あ…え？」

ファリニスが渡してきたのは、彼女が最初から持っていた鞄…肩から提げるタイプの可愛らしいピンクの色合いだった。

その鞄をまるごと俺に渡して、ファリニスは俺の部屋の方面へと向

き直る。

「…もし、私が10分経つてもここに来なければ…その鞄に入つてるすべてのものを使つてもいいです、ここから逃げてください…できるだけ、遠くへ」

驚きの提案だつた、ファリニスの言葉通りの意味でとらえるのなら

〈自身を犠牲に、ここから俺を逃がすつもり〉ということになる。

「なつ……!? ちょっと待つてくれよ、ファリニス！ それは…」

「大丈夫です、セグレトさんは…私が守ります」

そう言つて、俺の返答も聞かずには彼女は走り去つていつた…

第6話

「ファリニス…」

鞄を残したまま部屋に戻ったファリニスが心配になる…奴等は普通じやない、あの思念集合体とか言うのは…一人で叶う相手なんかじやないんだ
でも…

俺になにができるんだ…?

守られてばかりで…

なにも、できなくて…

「…?」

ファリニスの鞄から、キラリとなにかが光る
財布や携帯など貴重品ばかりの中に、確かに反射した光が見えた。
ゴソゴソと中を調べ…奥の方にある、小さくて丸いチエーンのついたようなものを手に取る

「これは…口ケツト?」

首から提げる、写真のはいった口ケツトのようだ

なかを開けてみると、そこには穏やかで優しそうな老人が思念論の本を持つて、それと緑色の髪の女の子が…笑いあつて仲良く写っている。

その後ろから優しく微笑む、二人の夫婦…

「……」

時間はもう10分は過ぎた

俺はロケットを握りしめ、鞄をもつてその場から駆けだした。

「このルートで間違いないハズですが…」

その時ファリニスは、裏路地から少し外れて住宅街に出ていた。

なにかを確認しつつ周りに警戒心を張り巡らせて、静かに足音を極力立てずに…慎重に歩く

(おそらく、思念集合体はセグレトさんを探るために糸のように手縛る術を持っている…セグレトさんの記憶喪失を解除してから、発見されるまで時間がかかるなさすぎたし…常に観察しているにしては、遅すぎる)

次第に小雨が降り注ぐ、手ぶらのままファリニスは辺りの警戒をやめずに進んで行く。

(そして、セグレトさんのきおくの搾取方法とスピードからして、多く見ても3体ほどの思念集合体がいるはず…2体は、部屋のなかで倒してるから、あとはなんとか探し出して残り1体さえ倒してしまえば…！)

その時、ファリニスの背後から

小雨に紛れて再び金色の瞳が光る

「…つー」

小雨に感覚を遮られてしまつたのか、ファリニスの反応が少しだけ遅れてしまう。

背後から忍び寄つてきた影、それはやはり思念集合体、しかしヤツの体は先程とは違い、腕と見える部分が鋭い刃物のような形状になつていた！

「く…っ！」

ファリニスの脇腹を、鋭くなつた刃物のような腕が掠め僅かに出血する。

不意打ちに驚き、ファリニスは思念集合体から目を離さずに距離をとつた。

「…食事の邪魔なわたしには、手加減をしない…ということですか」

傷口は浅い、若干の出血こそあれど致命傷ではなくまだ彼女は動けそうだ。

思念集合体はそこから動かず…じつと、ファリニスが動くのを待つているようにも見える。

(様子を見る…？なら、こちらから!)

ファリニスの左手の光が淡いグリーンに…そして紫色に再び変化する、セグレトの部屋で戦つた時と同じように

思念集合体はそれを見るや否や、スピードを出してファリニスに近づく。

づく！

「一足、遅かつたですね」

〈……！〉

思念集合体の体が、あの時と同じようにバシイツと軽い音と共に吹つ飛んでいく。

しばらくその場で悶えていた思念集合体は、雨を受けながらゆつくりと動かなくなつていった……

「はあつ……はあつ……やつた、よね……」

ゆつくりと近づく、思念集合体が突然飛び起きたことも想定し……常に警戒する。

（少しでも動けば、もう一度〈ねんりき〉で……）

既に彼女の片腕には紫色の光が帯びている、目の前の標的には万全の体勢を整えて……

その目の前まで来た。

そして、彼女は落胆する

(「……れは……!？」)

そこにあつたのは紛れもなく、動かなくなつた思念集合体
彼女が〈ねんりき〉で吹き飛ばした痕跡以外、変わりはない……

攻撃の痕跡が2つあつたことを除いて

第7話

ファリニスが思念集合体を攻撃した…しかし、その痕跡は2つ。

（一目で分かる…これは2つとも、紛れもなく私が〈ねんりき〉で作つた痕跡……

じやあ、この思念集合体は……わたし가セグレトさんの部屋で攻撃した…!？）

迂闊にも、ファリニスは見落としていた
相手の形状が変化したこと…不意打ちされたことにより、冷静さを欠いていたのだ。

相手は並みの手段で倒せる相手ではない、それが思念集合体である。

（となると、残りの1体は…つ！？）

その時、ファリニスは体に違和感を感じる

場所は腹部…じんわりと温かく、そして冷たい…静かにその感触が伝わってきた。

そこに目を落とすだけで、すぐにその違和感の正体は判明する

鋭い刃物のようなものに、腹部を貫かれていた

「つ……く…?!」

背後には既にもう一体の思念集合体がいた、先程倒した別の思念集合体と同じく腕を刃物に変えている

今度は、全く避けられず…ファリニスの腹部からは先程とは比べ物にならないほどに出血している。

ゆつくりと刃物のような腕を引き抜き、ファリニスは力なくその場にたおれこんだ。

(う…………くあ……つ……これは、まずい…)

腹部を刺されたこと、そして既に彼女の体は疲弊しきつており…この不意打ちがとどめになってしまった。

急所は外れたものの…彼女には立ち上がりていられる余裕さえもなかつたのだ。

「…くうつ…！」

最後の力を振り絞り、先程まで溜めていた〈ねんりき〉を発動させようとするだけのスピードで振り向き左腕を目の前に突き上げた。しかし、痛みのせいか…うまく集中できずに…集まつた光は霧散するように消えていく。

(そんな…つ)

目の前には、小雨で少し流れたもののまだ血のついた刃物のような腕が見える。

それをゆっくりと頭上に掲げて、力の入る様子が見えた。

(とどめ…を、さすつもり…ね)

それを回避することはできない、ファリニスの傷は大きく屈んだ状態のままいるために、その上半身を起こして移動するまでの力は残されていなかつた。

(…おじいちゃん、やつぱり…私)

「誰かを助けるなんて…できない、のかな…」

「うおおおおあああっ!!」

それは何者かの怒声だった

思念集合体でもなく、ファリニスでもなく

第三者…いや、ここにきて一番関係のある人物といつてもいいだろ
う

「せ…セグレトさん!?」

ガアンツと、セグレトは両手でしつかりと握ったままの鉄パイプを
思念集合体に向かって思いきり横廻ぎで振った。

座つたままのファリニスには当たらず、刃物のような腕を振り上げ
ていた思念集合体には、クリーンヒット。

しかし、思念集合体の体は鉄パイプの攻撃を受けなかつた。

いや、正確には受けた…ドロツとした形状になつてセグレトの鉄パイプを受けきつっていたのだ。

「うそだろつ!?」

「なんで…なんで来たんですかっ！あなたが……狙われているのは、
セグレトさんなんですよ!?」

セグレトは鉄パイプを離さない

思念集合体がセグレトを見る、そして振り上げていた刃物のような
腕を、今度はセグレトの上で振り上げはじめる

（ヤツはもう、手段を選ばないつもりだな…俺を殺すつもりで…）

「上等だあつ!!」

セグレトは鉄パイプをさらに強く握りしめ、思念集合体の腕ごと思
いきり薙ぎ払つた

第8話

思念集合体とかいうのに襲われていたファリニスを、ギリギリのところでなんとか助け出せた…。

思念集合体の腕の刃物を鉄パイプで砕き折つて、ヤツが悶えながら離れていく。

「ファリニス、大丈夫か？」

ヤツがどんな攻撃を、いつしてくるかわからない…俺は前方の思念集合体から警戒心を解かないままファリニスの傷を気遣つた。

「…はい、私は…大丈夫です」

そう言つたファリニスだが、腹の部分に深めの傷が見える…くそつ、間に合いはしたけどもう少し早く助け出せば…！

「でも、セグレトさんは…逃げてください…ここは私に任せて、早くつ…！」

よろよろと立ち上がるファリニス、誰が見たつてとても任せられる状態には見えない

俺はファリニスを制するきもちで、イヤだと答えた。

「ファリニス…これ」

ポケットから取り出したものを、ファリニスに手渡す。先程鞄から取り出した、口ケットだ。

「こんな大事なもの…俺に預けないで、自分で持つておきなよ、大事なものなんだろ…？」

「…つ、でも、セグレトさんが…！」

「…」でファリニスを見捨てるくらいならつ、いつそ死ぬ!!」

「つー。」

じわりじわりと、思念集合体は損傷した腕を治している。
でも

逃げたくない

「俺は一度死んだんだ、それを助けてくれたファリニス…君のために、命を使いたいんだ！」

震えは止まらない、でも、逃げたくもない
うで全体が熱くなる、握りしめてたからだろうか？俺は…思念集合
体を睨み付けて、鉄パイプを振りかぶる

「うりやああああっ!!」

しかし、思念集合体の腕の回復は終わっていた
再び刃物と化した腕が生え、鉄パイプを真つ二つにしてしまう。
俺はその衝撃で後ろに、ファリニスのすぐそばまで吹っ飛ばされ
た。

「ぐあっ！」

「セグレトさん！」

鉄パイプはもう使えない、ヤツは刃物の腕がある…対抗する手立て

も、ない。

「…くそつ…！」

「…今からでも…セグレトさん、逃げて…」

そうだ、いつもの俺なら

〈てめえ、もう仕事やめちまえよ！〉

〈使えねえやつをうちに置いておく余裕はねえんだ！〉

毎日の嫌なこととか

＜ちゃんと、頑張ってる？仕事…上手くいってる？＞

後ろめたいことから

今までの俺だったら きっとファリニスの言うとおりにして
…逃げてた

「いろんなことから逃げてたんだ、記憶が戻つて…ようやく、思い出した」

でも…

今は、イヤだ

逃げるのは、もうおわりにする

「今逃げたら自分のことを否定してる気がする、逃げたら俺の…セグレトの心を殺すことになる」

真つ二つに割れた鉄パイプはもう、使えない

武器はないにもない、手立てもないかも知れないけど

「死にたくないから、死なせたくないから戦うんだ！死んだって、構うかつ！」

「それが、俺の生き方になるから」

その時だった

右腕から、赤い光が迸る

激しく、強く、神々しく

「うわっ……!?」

「光……、私と同じ……！」

腕から輝きだしたその光は、以前ファリニスの使った不思議な力の光に似ている。

温かくて、それでいて……身近に感じるような気がして……

（セグレトさんが覚醒してるのは、間違いなく……でも、そんな、彼をこんなことに……巻き込むなんて……）

「熱っ！」

腕が燃えてるかのような錯覚、まるで炎に包まれているような高温

の体感だった。

もう片方の腕で掴んでみれば、右腕は全く熱を帯びていない。

でも、間違いなく右腕自身は、千切れるくらいの熱さを感じていた。

「ぐう…あつ！」

（どのみち、このままじゃセグレトさんの腕が持たない……）

ファリニスが重たく腰をあげて、傷を抱えながら起き上がる
そして、俺の右腕に手を添えて…目をつぶり集中するそぶりを見せた。

「ファリニス…？」

「落ち着いて、目をつぶつてから私の呼吸にあわせて…ゆっくり…
気持ちを整えてください」

言われたとおり、目をつぶつたままファリニスの静かな呼吸に俺も
合わせると、気持ちがだんだんと落ち着いてくる。

右腕に感じていた熱さは次第に落ち着いていき、覆うようだつたほ
どの熱は右腕に馴染むように次第に落ち着いていった。

(熱が引いていく…もう、熱も感じない…でも、なんだろう?・違和感があるな…?)

右腕には、熱こそこそなくなつたけど…でもなんだろう?
毛が逆立つような、チリチリしてゐる感覚…右腕だけ…

違和感がわからず、俺は目を開けた

「ん…?」

そこには

腕が赤く、光に包まれて いるような

大きな爪のかたちをした赤い光が、俺の右腕の全体を纏つていた。

第9話

腕から指の先まで全体を覆っていた赤い熱が、今度は腕から指の先までを赤い光が…

さらには手のひらと、手の甲から数cmほど浮いて…光で作られた巨大な爪をもつ手が構築されていた。

「うえつ?!こつ、これ…なんだ!?」

急な体の変化に慌てて取り乱そうとするが、目の前には思念集合体がいる…油断できない。

思念集合体は今しがた腕の回復を完了させたのか、再び刃物の腕を生やしていた。

「よかつた…間に合って」

今まで右腕に自信の右手を添えていたファリニスが、その手を離してゆっくりとしゃがみこんだ、その動きは遅く、傷口が痛々しい。

「これ…ファリニスが？」

「…私に、とつては…あまり気の進まない手段でした…でも、セグレトさんの、気持ちが…あなたの力を呼び起こした…だから、私も、セグレトさんの力の発揮をお手伝いしました」

「そつか…これ、ファリニスと同じ光に見えるけど…なんか関係あるのか？」

「詳しくは…わかりません、セグレトさんのその力がどんなもののか…ですが、かなり強力なワザに…なるはずです」

冷静に分析を試みるファリニスだが、あまり詳細なことまではわからず：

ただ、分かるのはそれが強力であること…それが相手に通用するレベルなのかは、見ただけではわからなかつた。

「やつてみるしか、ないか」

相手の戦闘体勢を待つていたかのように、思念集合体はセグレトがこちらを向いた瞬間に独特な動きでズズッと素早く、セグレトに接近する

「きます！」

グッと足に力をいれ…勢いよく踏み出し、接近してくる思念集合体に向かつて

セグレトも思いきつて走りながら接近していく。

これはセグレトがファリニスのすぐそばにいたために、彼女の身を案じて戦闘の場になる所をファリニスから離れさせようとした結果

である。

「うおおおりやあああっ！」

巨大な爪の構築された右腕を振りかぶり、思念集合体の体に狙いを定めて振りおろす！

＜！＞

素早く思念集合体は反応、先程回復の完了した万全な刃物の腕で受け止めようとする。

しかし、次の瞬間

刃物が、まるで柔らかい氷を碎くように…あつさりと碎けた。

＜！＞

「へ…？」

「うそ…」

呆然と、セグレト達は赤く光る爪の威力にただ呆然としてしまう。両手持ちの鉄パイプでやつと折れる刃物を、ソレは…いとも簡単に粉々にする。

＜…＞

思念集合体も、一度怯んだが…すぐに腕の回復に力を使っているようで、距離を多目にとる。

「させらかつー！」

距離をとつたことで、セグレトが素早く反応して距離を縮めるためにダッシュで近づいていく…！

「…いけない！セグレトさんっ、後ろです！」

後ろからみていたファリニスは、後ろからセグレトに接近していく何かにすぐさま気がつき、大声をあげてセグレトに指示を出した。

「えつ…うわっ?!」

バシイツと、鞭を激しく打ち付けるような大きな音と痛みがセグレトの胴体を捉えた！

ファリニスの呼び掛けが早かつたために、セグレトはすんでのところで右腕を出しガードに成功する！

「つ…！」

飛んできたのは2～3mほどの長い触手だった。

ガードされた触手は、ふわりとセグレトの上を通して思念集合体との間に立ち塞がるようにふわふわと浮いて留まる。

良くみれば、その触手は思念集合体から出てるよう見える…！

「行かせないつもりか…くそつ！」

触手の動きは素早く、セグレトに絶えず攻撃してくるために隙がなく突破ができない！

迂闊に近づけば触手の猛攻にやられてしまう、あと一步の踏み出しへ止められてしまつた。

「このつ…つ…！」

右へ左へと動くその触手は捉えることもできない…

その時、セグレトの頬をなにかの黒くて丸く小さな何かが速いスピードで通りすぎる。

その直後、触手がズガーンツという音とともに弾けて消えた！

「まだヤツの回復は終わってません！今なら、とどめをさせるはず…っ、今のうちに…！」

後ろを見ると、ファリニスが息を切らしながら腕を突きだしているのが見える。

なにかしらのサポートか…と、セグレトは納得してすぐさま思念集合体の元に切り込む！

(こいつで…)

回復している途中の思念集合体は、まだ動けない！

走るスピードをまったく緩めさせずに、大きな歩幅と頭を低くした低姿勢で切り込んで、巨大な爪を大きく振りかぶった。

「どうだあつ!!」

すばやく振り抜かれた右腕

宙を舞つたのは、思念集合体の上半身だつた。

屈強そうな胴体からはなにも出さずに、ただゼラチンのような質感の上半身と下半身、2つに別れた。

その後、弾けて四散した。

思念集合体は、もう動かなくなつた。

第10話

目の前で青い物体が蠢く

それは、刃物の腕で人を斬り裂いた。

何人も

何人も

見知った顔の人が、戦っている

何人も

緑色の髪の毛の、長いスカートの女人だ。

やがてその人も、同じように

刃物の腕で

「うああっ!!」

とんでもない悪夢を見ていたようだ…

汗が身体中から滝のように出ている、中に着ていた黒色のシャツは
パツと見では分からぬが触つてみるとびつしょりと濡れている…

(汗：風呂、入らないとな)

寝ぼけた表情のまま、俺は服をバサリと枕元に脱ぎ捨てて脱衣場へ
とむかう。

あまり周囲は見てない、室内が暑くてあんまり気にしてられないし
：正直部屋のなかがまだ汚くて、見てられない。

「暑いし、面倒だし…シャワーにするか」

シャツと上着は部屋のなか、ズボンやらパンツは脱衣場のかごのなかに投げ捨てて、ガララと浴室の引き戸を開け

「あ…」

「ん…？」

よく聞いてみれば、シャワーの音が最初からしていた。

そしてよく見れば、引き戸のガラス部分が曇っていた。

よくよく聞いてれば、鼻唄が聞こえていたような気がした。

そしてよくよくよく見てみれば…ファリニスが中にいた。

[...]

[...]

「キャラーナーナーッ！」

スパーク!!

と、そこで一旦意識がとんだ

次に目が覚めた頃、俺はまた布団まで戻っていた。
しかし今度は：顔を真っ赤にしたファリニスもいる、うつむいたまま
まなにも言わずに：俺が起きたことには気がついてるみたいだけど
⋮

とりあえず体を起こしてファリニスを促し、隣のテーブルのある部屋に移動した。

「……」

「……」

(や、やばい!!さつきのことが頭から離れてなに話せばいいかわか
んねえ…!!)

なんだか顔が熱くなつていく気がしたけど……気にしない気にしない
い：

「あ、あの……めんなさい、私咄嗟に……その……恥ずかし、くて……」

ファリニスの第一声は、謝罪だった。

顔は真っ赤にしたままうつむいたまま、さつき布団の横にいたときとまったく変わらない体勢だ。

（つて、なにファリニスに謝らせてんだ俺えええ!? よく確認しなかつた俺が悪いに決まってる!）

「あ、いやファリニス? 俺が確認とかしなかつたし……正直いって、俺が断然悪いと思う……いや、俺だろ! 悪いのは、かんつぜん俺だ!……ごめん」

「いつ……いえ! あの、そもそも私がセグレトさんのバスルームを勝手に使つてたのが悪い

ですから……その、洗面器も……すみません」

洗面器? と、ファリニスの奥の方の廊下に転がつている浴室にあるはずの洗面器が転がつていて見えた。

ああ……きっとあれだな、気絶した原因は……

「そ、それはともかくさ…あの、思念の…集合体だつけ?…あいつは、どうなつたんだ?」

「あ、そ、それはですね…」

ファリニスの話によると
俺があの巨大な爪で思念集合体を真つ二つにして、勝負はついた。
そのあとに俺はそのままぶつ倒れて、巨大な光の爪も消えていた…
意識が無くなつたかららしい。

「…ほんとに…夢じゃない…んだよな」

正直…ファリニスと出会つてからのあの短い間は、夢としか思えて
ない…思念集合体とかも辻褄が合うのは分かるし…でも、自分のなか
ではとても非現実的で…

「セグレトさんを、あんな戦いに巻き込むのは…私もしたくはなかつ
たのですが…」

そう言いつつ、ファリニスは服をペラリと捲つて脇腹の辺りを見せ
てきた。

そこには、昨日刺された場所と同じところに刺し傷が…しかし、傷跡はまだあるものの傷口は塞がっているようだ。

「この傷を受けて…私が今ここにいられるのは…紛れもないセグレトさんのおかげです、ありがとうございます」

そう言うと、彼女は深く頭を下げた。

「いや…なんていうか、俺もあんな力があるとは思わなかつたというか、俺も生きてるのが不思議…かな…ハハ」

そうだ、あの力…あの巨大な光の爪があつたからこそここに俺とファリニスがいるんだ。

…でも、俺はあるの力について何一つ分からぬでいた。

「生きてて10年以上にもなるけどさ、ファリニスや俺の不思議な力とか…全然わからない、まだ記憶喪失つて気分になるくらいに」

「あの力は…ポケモンとしての、能力です」

「ポケモン…？」

第11話

「ポケモンって…なんなんだ？また新しい専門用語なのか？」

「いえ、割とメジャーな…というわけでもないですね、科学者などの研究者の間では意外と知られている事実なのですが一般の方には内密にしていることが多いらしいですから…まずはそこからお話しします」

ポケモンという単語自体、俺には聞いたことない。

ニュースなんてあんまり見ないし、新聞も取らない情報に疎い俺には尚更なのかもしれない…が、そこのところの説明をしつかりと、ファリニスはしてくれるようなので姿勢を正し、聞く体勢を取つた。

「この世界には人間…と呼ばれる種族の他に、細かく分類された私たちのようなく「ポケモン」と呼ばれている種族がいるのです、今で言えば私たちは人間と瓜二つの姿形をしていますが…昔は違いました。」

「俺たちの種族…ということは、ファリニスと俺はまったくおんなじ種族なのかな？光るワザを使えたし…」

あの技の詳しいことはなんにもわからないけれど、俺の常識の範疇を大きく超えてる。
同じように光りをだすワザを使うならもしかして…と思つたが、ファリニスは首を横に振る。

「ポケモンという広い枠の中で考えれば、セグレトさんの言うとおりですが・・細かく詳細な分類では私とは全く別のポケモンということになります。」

種族の判別方法についてはファリニスは細かく語らなかつたが、嘘をつく理由もないし専門用語とか多くて解説を省いたんだろうと、それになによりもファリニスを疑う理由もないでの俺はそのまま鵜呑みして信用することにした。

「それじやあ…その、ポケモンの力を使って俺が倒した…それだけ?」

「そう…ですね、私たちの力はまだよくわからないことが多いくて、謎も多くて、様々な科学者たちに調査されているところなんです。」

「昔からある謎って言えば、なんとなくもう解析されているモノが多い気がある。」

遠くの国のお話だとかなりまだわからんでもないけど…でも、これは多く存在する種族の話だ、意外と近場でありふれているようなことだし、研究もはかどりそうなもんだけど…?」

「…実は、ポケモンは一度絶滅した…と思われてたんです。」

「…えつ？」

ファリニスの話では、数百年前からポケモンは人間のそばで存在していた：が、その姿形は今の人間のような容姿とは違つて種族ごとに大きな差があつたという。

しかしそんな時代の最中に、ポケモンたちはその特徴的な姿を忽然と人間たちの前から消した：

「その時に突然、ポケモンたちが人間と似たような外見に変わつたつてこと・・か？」

「だいぶ妙な話ですね：：急に姿形が変わつたりするなんて、生物学上はまずありえないことです、何百年の歳月をかけて変化していくのが、普通ですから…」

一度絶滅したと思われていたこともあつてか、研究はそんなに進んでいなかつたとファリニスは言う。

要は、ポケモンはある時を境に姿が変化した：でもその原因は不明、研究してる人がいないから、そして今はポケモンたちが人間とほとんど変わらない為に人間社会に溶け込んでいる、ということらしい

「でも、今は隠れて認知されてるつてことだろ？ ファリニスも知つてるつてことは、表の方には出てこない裏の話：みたいな？」

「一部、ゞく一部の組織はポケモンの力を活用しようとしている…とかなんとか、あとポケモンについては研究者の中ではトップシークレットなのは暗黙の了解です」

「口に出しちゃいけないって…とか?なんで?」

「ポケモンとしての力を悪用されることを恐れて、です…周知の事実にしてしまうとそれを悪用しようとすると輩が必ずいますから」

確かに、腕から出たあの巨大な爪の力は凄いものだつた。

腕の感覚がぼんやりとしていてビリビリとしているような…そして思念集合体をなぎ払つたあの瞬間…俺の脳裏にはその光景が焼きついていた。

「とにかくセグレトさん、そのポケモンの力は使わないことを約束してください!その力は…強力すぎます、特にセグレトさんのものは…」

「わ、わかつた…つていつても、やり方なんてよくわかんないけどな」

ブンブンと腕を振つてみても、あんな光は出ないしふりびりだかぼんやりだかの感覚はもうしない、あの時だつてなんであんなことに

なつたのかはよくわかんないし…

「ポケモン…か」

おれは自分がただの人間じやないことに、違和感を感じて…現実感は相変わらずなかつた。

まだ夢を見てるなんて思つたり…でも、彼女の腹部にあつたかすかな傷跡…それは紛れもない事実であり現実

その傷跡を見ながら、俺はなんだか無性に悔しい気持ちになつた

(もつと早くこの力が使えた…ファリニスを傷つける前に、助けられたのかな)

「セグレトさん？」

「ふあつ!? あ、いや、なんだ?...」めんぼーっとしてた…」

気がつくとファリニスの心配したような表情が目の前まで近づいて、まんまるな瞳にびっくりして俺の口から変な声が出た。

「ちよつとまた難しい話でしたからね…」

(ちよつとどころじやなくて超難しかった…)

「そうだ! お茶でもいれますね、台所お借りします!」

そう言うとファリニスは急ぎ足で、台所へと駆けていった。

第12話

それからほどなくして、ファリニスがうちのティーカップに紅茶を注いで2つもつてきてくれた。

うちには紅茶なんてあつたかな…と考えていると、ファリニスが力バンの中から開けて間もないティーパックを見せてくれた。

「セグレトさんが眠っている間に近くのスーパーまで行つてきたんですよ、すぐ近くにあつて…助かりました」

「あー、あのすこしだけいスーパーだよな…そういえば今日は安売りの曜日だつた…かな?」

熱いうちに一口紅茶を飲みながら、俺はファリニスの話に返事をした。

「はい、このパックも、他の物もとつても安く買えたんですよ」

喜々しながらファリニスは安く買ったものを、袋ごとこちらに渡してきた。

中身は洗濯洗剤やらお茶漬けの素やら、5食入りラーメンのパック

⋮

「なあ、この…ドッグフードは?」

「それはですね！通常価格から200円も安かつたんですよ！すごいですね！」

「い、いや…そういうことじゃなくてだな」

「うち犬いないんだけど」

「……」

黙つたまま、ファリニスの顔が見る見るうちに赤くなつていくのがわかつた。

「あ、えと…あれ、ほら！紅茶淹れてきますね！」

「までまでまで!!紅茶さつきもらつたばつかりだから！まだ一口しか

飲んでないから！落ち着いて！」

「一口しか飲んでないんですか!? あついんですね!? わかりました! 水入れましよう水!」

「ちよちよちよ！ダメダメダメダメ！水はダメだつてー！」

「あの頃のファリニスー！おーい！戻つてこーい！」（泣）

「すみません…取り乱してしまつて…グスン」

しばらくしてから落ち着きを取り戻したファリニスが謝罪して、冷めてしまった紅茶を口に含んだ。

気にしないでいいから、と俺も紅茶を一口飲んでから声をかけるもドッグフードを見てから彼女が大きくなため息をつく。

「安くなつてると、無性に買いたくなつてしまつて…昔からなんですよお…」

「あはは…まあ、わからないでもない…かな…」

妙にでかいので、俺の隣で存在感を放つドッグフードは嫌でも目にに入るだろうな…

俺はドッグフードを脇のタンスのそばに置いて、ファリニスの視界に入らないようにした。

「じゃあ…私、そろそろ行きますね」

いつの間にか紅茶を全て飲んでしまつたファリニスは、自分のかばんを取つてせつせと身支度を始める。

「え？ 行くつて…」

「またフィールドワークをしに、別の街へ行きます…まだ思念の研究も始まつたばかりですから」

「そつか…なんだか、寂しくなるな」

ずっと一緒に…なんて思つてたわけじゃないけど、やつぱりなんだか寂しかった。

思えばファリニスには助けてもらいつぱなしだ、死にかけていた俺を命の危機から救つてくれたし…あの力を使うためにサポートしてくれたのも、ファリニス。

「それじやあ…」

ファリニスが何かを言いかけたその時

不意に彼女の後ろ姿が、昨日別れた時の姿と重なつて見えた。
(私が守りますから) といつて、俺の前から一度姿を消したあの日

彼女は死にかけていた

思念集合体に捆まれて、動けない彼女を遠目に見つけたあの日
遠くからかすかに見えた気がした

頬を伝う一筋の水滴

あの日降っていた雨だったのかかもしれないけれど

俺にはそう感じられなかつた

「セグレトさん？」

頬を伝つて流れ落ちた涙かもしれないそれを見て、俺は手を出さずにいられなかつた。

助けなきや、でも何ができる？

無力かもしけない、役に立たないのかかもしれない

でも、あの時だつてなんとか出来たんだ

「俺も…ついて行くよ」

俺はもう、ファリニスが泣いているところを見たくない

「えつ…でも、セグレトさんはまだ体が…」

「まだ助けられた借りを、返した気になれない…恩返しがしたいんだ」

そう言い終わると、力があふれてくるような気がした。
ファリニスが真剣な表情でジッと俺を見る、俺は取り繕うまでもなく…自分の中の真剣な表情で答える。

「どう断つても…ダメみたいですね」

ニコッと、ファリニスは真剣な表情から一変して笑顔を見せた。
場の空気が明るく、窓から光が差し込んでくる…テーブルに置かれた陶器のティーカップに光が注がれて、光を眩しく反射させる。

「じゃあ、一緒に手伝つてください…セグレトさん」

「…ああ！」

空の雲間から、光が差し込み

太陽がその姿を表そうとしていた…。

「ドッグフード持つていきます？」

「要らない」キッパリ

第13話

「荷物はこのくらいでいいか？」

「あと、これも持つていきましょう！次の街までは長いですから」

部屋の中で、俺は大きめのリュックの中に大量の荷物を詰め込んでいた。

あれよこれよと詰め込むとすぐにパンパンになってしまって入らなくなってしまうので、食料も着替えも最小限に：力の限り折りたたんで、正直手が痛い。

「これくらいにしておいて…あとはフレンドリイショップで買い足そ
うか」

※この世界のフレンドリイショップは、旅をするにあたつての必需品を取り扱う専門店という扱いです。

携帯食料、山などの難所を越す為に必要な道具も取り扱っている。

「そうですねーあ、私が買ってきて…」

「…えっと、やつぱり一緒に、来てもらつても…いいですか？」

やや赤らめた顔で、先程の言葉を訂正してから一緒に来るようにお願いしてきた。

先程のドッグフードの件を、まだ気にしているようだ

「あ、ああ！一緒にいこうか」

そういうと、ファリニスはホツとしたような表情を一度見せてから、嬉しそうに頭の髪飾りを動かしてから歩み寄ってきた。
・・・あの髪飾り・・・髪飾りだよな？耳か？

「ささつ！いきましょう！」

「お、おう…」

気になることはあるけど、とりあえず後回しかな：ファリニスに腕を掴まれながら、俺たちは大きな鞄を持って家を出た。

部屋の鍵を秘密の隠し場所にしまって、一応家主さんに話を通して…旅行という形で話はまとまり、しばらく家を空けても大丈夫ということで荷物を背負つて俺たちは部屋を後にする。

「寝袋つてこんなでつかいんだな…お、こつち安いな」

俺の家から徒歩で10分、改装工事を済ませたフレンドリイショップのなかに俺たちはいる。

寝袋や非常食品、最悪野宿もするだろうし万が一の準備は怠らないほうがいいだろう。

「生地が薄くないですか？地べたに寝るにはちょっと背中が痛くなりそう…」

「あー、たしかになあ…じゃあ、多少高いけどこつちかな？」

思えば、こんなふうに誰かと一緒に買い物なんていつぶりだろう？実家に住んでる時に母さんといつたくらいかな？異性との交流もいつたいいつぶりなんだろう…というか

おもえれば女性と口をきいたのだってすごい久しぶりだ、何年…とまではいかないけどほんとに…
むしろ…裸を見たのだつて…

「セグレトさん？あの顔赤いですけど…」

「へ!? あ、いやなんでもないなんでも！」

なんだか恥ずかしくなつて、顔が赤くなつてみたいだ
冷静に…よくせつかちとか言われるけど、ここは冷静だ！冷静に…
！と頭の中で言い聞かせながら、頬をペチペチと強めに叩いた。

「結局かばん、もうひとつ買っちゃいましたね」

フレンドリイショップから出てきた俺たちの背中には、お互に大きめの鞄を背中に背負っていた。

俺が背負っていたのは自宅から持つてきたものがたくさん入つてる私物と非常食のたぐいが大半だ、そしてファリニスの方は寝袋などの比較的軽い荷物を入れたものを持つてもらっている。

「悪いな…お金出してもらつて」

新しくカバンを買い、非常食を追加で買つたり寝袋も買つて…なんていろいろ買つてたら代金がえらいことになつてしまつたので、すこしファリニスに出してもらつたのだ。

そもそもそんなに貯金してたわけじやなかつたし、旅行の予定もなかつたからなあ…しつかり稼げばよかつたと、深く反省する。

「いえいえ、気にしないでください」

につっこりと、彼女は全く気にしてないよう笑つた。

旅の準備は整つた

覚悟もできた

あとは踏み出すだけだ

「じゃあ・・行こうか、ファリニス！」

「はい、まず目指すのは北にある街：〈ルメタルシティ〉へ！」

第14話

「ほうほう…旅行ですか…準備万端ですね、アンタ」

「あはは…何があるかわからんいつすから…今の時代」

俺たちは今、街の北門にいた。

この街は東西南北それぞれに大きな門があり、そこで街への出入りを厳重に管理されているのだが…少々きつすぎると悪い意味で評判だつたりもする。

それもこれも、過去に違法的な薬物の取引がこの街であつたとか…それから厳しく取り締まり、様々な書類を記入する必要が出始めた。

旅をするには許可証を発行する必要があるのだが、この許可証の発行には何ヶ月と時間がかかる…もちろんだがそんなに長くは待つてられない。

今すぐ出発するために、俺だけまずは〈旅行〉という名目で街から出る必要があつた。

「まあ…そうだねえ…君の住んでる家主さんからの連絡でも確認して
るし…パスポートは?」

「あ、ハイ持つてます!」

ポケットから赤い手のひらサイズの手帳のようなパスポートをサツと取り出して見せる。

それを見て門番は確認し、手元にあつた出入管理用紙を俺の方に荒々しく渡してサインを求めた。

付属していた黒いペンで、俺は自分の名前を丁寧に記入してまた門番に渡す。

「じゃあきみが通るのを許可するけど、問題は起こさないように」

「はいーどうも、ありがとうございます!」

なるべく低姿勢で、ササッと門を通りやり過ごす。
門を抜けてトンネルのような中をしばらく歩いてると…やがて光
が見えてきた。

ほどなくしてからトンネルを抜けた、その先には街の中にはあまり
見かけない自然がたくさんある。

「おお…緑だ」

生い茂った木々、人々の足や車のタイヤで踏み固められた土の道が
街から出てきた俺を歓迎する

鼻の先についた自然の中にある独特の葉の香りが古い何かの記憶
を呼び起こし、風に乗ってきた2、3枚の葉が俺の目の前で更なる上
昇気流にさらわれて空に舞い上がつていった。

「…と、ファリニスを待たなきやな」

抜けたトンネルの脇にあるベンチに腰とかばんを下ろして、次に出てくるファリニスを待つことにする。

ファリニスは普通に旅の許可証を持っており、この街に来た時もその許可証で入ってきたので時間もそんなにかからないはずだ。

やがて、カツンカツンと硬い足音が自然の音に混じって聞こえ始める…。

「お待たせしました、セグレトさん」

ベンチに座った俺の目に前にファリニスが現れた。
あたりを見渡しているうちに意外と時間が経つたなど、思いながら重たいカバンを背負つて立ち上がる。

「いや、そんなに待つてないよ…というか、さつき座つたばかりに思えた」

「フフ…時間結構取られたはずですよ、ここ自然見てぼーっとしちゃつてましたか？」

否定できないな、とはにかんで笑つて見せる。

時計をいちいち確認してたわけじゃないから何とも言えないけど、それなりにぼーとしてた気がするし

「それよりも、もう出発しようか？」

「そうですね、日が暮れる前にルメタルシティまで行きたいので」

そう言いながら、ファリニスは以前から持っていたカバンの中からすこし古くなつた地図を取り出す。

開いてみると赤いペンでいくつかのマークがされており、見た目と相まってだいぶ使い古されているのがわかる、そして地図の中央辺りに〈ルメタルシティ〉と小さめの字で書かれていた。

「出発を急ぐほどではないんですが、夜道も危険ですから」

「たしかにな…なら、善は急げだ」

目の前に続いている道の向こうを見て、まだルメタルシティは遠いことを確認する。

重たいカバンを背負いながら俺たちふたりは、急がず焦らずのゆつたりとしたペースでるメタルシティまでの道のりを進むことにした。

10分後：

20分後：

30分後：

「まだか…」

「街の外壁も見えませんね…」

時たまに看板が立つており、そこにルメタルシティまでの行き方が書いてあるが変わらずに道なりまつすぐなため「ルメタルシティまではこの道まつすぐ」がテンプレのごとく、毎回おんなじ字体で書いてある。

「ふう…」

気がつくとファリニスの呼吸が荒くなっているのが聞こえる、ここまで30分間休憩なしで重たい荷物を背負つて歩いてきたんだし、疲れてくるのも仕方ないだろうな…かくゆう俺もかなり肩や腰辺りに疲れを感じる。

「少し休憩しようか？」

「あ、いえ！だいじょうぶですよ、このまま行きましょう！」

そう言つてファリニスは元気に振舞うが、疲れているのは明白だ
ここは…

「あいたたたつ！」

大声を出してしゃがみこんでみせる
案の定、慌てふためいた様子でファリニスが心配そうな顔で覗き込む。

「えつ、えつ?!どこ、どうしました!？」

「えーっとね、足くじいた！うん、超痛い！ごめんファリニス、休ませ
て！」

一瞬、ん？と疑問に満ちた表情を見せたあとにファリニスは俺の足
を見てから…ハツとしてちょっと照れたような顔に変わつて、こほん
と軽い咳払いをしてから 仕方ないです
と近くの座れるような場所まで移動していった。

「…ありがとう」

「ふはあ…疲れた時のお茶は美味しいなあ…」

道端の脇にブルーシートを敷いたあとに、ファリニス自前の水筒に入ってきたお茶を一気に飲んで喉の渴きを潤していた。

案外この道を歩く人はおらず、業者関係のトラックや家族連れの自家用車が通り過ぎていく…俺たちみたいに徒歩で旅をする人も、いないうようだ

「空腹や喉の渴きは、最高の調味料といいますからね…あ、お菓子食べますか？」

「おっ、いただくよ！」

ファリニスの持っていた方のカバンから、俺の買った覚えのないファミリー・パックのお菓子が出てきた。

大袋のチョコレート…か

「そういうえば、チョコレートとかつて遭難した時にいいエネルギーになるんだつけ?」

「そうですね、こういうおおきなものじゃなくて板チョコとかなら小さくて手軽ですし…あつとど！」

大袋のお菓子に大きくて、カバンから出すときに一緒に中身がポロリとこぼれ落ちた。

ブルーシートのうえにカチヤンと金属音を立てて、太陽光が反射して眩しい光が遠くの木々に当たつていく。

その金属製のものに、俺は見覚えがあつた。

「あ…それ、あの時の？」

思念集合体に襲われて逃げてきたとき、ファリニスに託されたかばんに入つてた口ケツトだつた。

ファリニスが何気なしに開く、中の写真は変わらずに年配の老人と幼い頃のファリニスが写つている。

「そう…なんですよね、この口ケツト…」

先ほどの明るい表情から一変、ファリニスの表情が曇つている。口ケツトの中の写真を見てからだ…写真を見つめて正座したまま、動かない。

「嫌なこと聞いたらごめん…ファリニス、その写真つて…小さい頃の

？」

「…お話ししましょう」

「え？」

「私がこの、思念論の研究を始めたきっかけ…私の、祖父のこと？」

第15話

その始まりは私が…まだ幼い子供の頃、ここから遠く離れたひとつ
の集落の中で私の家族は生活していました。

人もポケモンも混濁したその場所で、私たち家族は幸せに過ごして
いたんです。

そしてその頃の私には、ある日課がありました。

「おじゃましまーす！」

私は毎日をとある場所で過ごすのが日課でした、そこは幼い私でも
すぐ行けるような自宅の近い場所にあるひとつの大好きな建物…光の
あまり差し込まないその場所には、一人の老人が住んでいたんです。

「おお、ファリニス…いらっしゃい」

歳を重ねたその人は私の父方の祖父、研究家としてその大きな建物
…研究所の中でひたすらに、ある研究を続けていました。

それが…思念論

当然その頃の私には思念論のことなんてわかりません、毎日祖父の
研究所に入り浸っていた理由も研究とは一切関係のないことです。

ただ、私は祖父の一生懸命に研究に励む姿…その真剣な眼差しが、好きでした。

「どれ、お菓子を買ってあるから好きに食べなさい」

「わあい！ありがとう、おじいちゃん！」

いつも研究所に遊びに来ていた私にお菓子を買ってくれたり、休憩の合間に私と遊んでくれたりと…祖父は優しくて、温かい人でした。

「…あれ？」

その時、私は研究室の片隅に置かれたゴミ箱の中にある一枚の紙を見つけました。

少々雑に書かれてはいるものの、もともとの白紙を埋め尽くすようにびつしりと文字が埋め尽くされているのがわかりました。

くしゃくしゃになつてはいたものの、その紙に書かれていた文字からは若干ながらの温かみを感じました…ポケモンとしての力の表れだつたのでしょうか？

「ねえおじいちゃん？なんでこれ捨てちゃったの？」

私の声に反応して祖父が振り向き、そのくしゃくしゃの紙を見て…一瞬だけ悲しそうな表情を見せてから、すぐに笑顔でこう言いました

た。

「それは…うまくまとまらなくてな…」

そう言つて、また机の方に向きなおしました。

文字をびっしりと埋めておきながら祖父の言つた言葉くまとまつてない>という言葉に疑問を覚えながら…私はその紙を持つたまま近くのお菓子の置いてあるテーブルの椅子に座りこんだ。

最初から最後まで埋め尽くされた一枚の紙をテーブルに置いて、私はお菓子の小袋を開けてそれを一口だけ口に含む。

なんとなしに上から手のひらで紙を撫でてみる、サラサラとした紙質は心地よい感覚を皮膚の上から伝えてきて…

書かれていることは分からなかつた、まだ無知な私には無理もないことでしたが…

「ねえねえ!この紙、私がもらつてもいい?」

「む?ああ…構わないよ、でも落書きも書けるところもないけどいいのかい?」

「うん!」

その紙をテーブルの隅に置いてから、私は祖父の机に椅子を寄せていく。

難しい顔をしながら祖父はまた白紙に万年筆でガリガリと文字を羅列していく、その意味はもちろんわからないが速筆であるにも関わらず文字は丁寧で読みやすいものだつたのを覚えていきます。

とても：熱心で、一日の半分以上をそんな調子で過ごすのが祖父の日課でした。

そんな祖父の研究は難しく、当時は一緒に研究してくれる仲間もいなかつたようです。

それでも一人で研究結果をまとめて学会に持ち込んで思念論の証明を、多くの人びとに認めてもらうために祖父は全てをかけていました。

しかし…

（思念だつて？くだらない！）

（世迷言だ！）

（すべて憶測じやないか！）

心無い学会の方々の言葉を、毎回浴びせられて：
一度私たち家族が迎えに行つたときはほんとにひどかつたと、父が話していました。

「父さん、もう無理をしないでください」

「…すまん、わしは…」

父は研究をやめさせたかったようですが、祖父はどうしても…あの研究室での研究を続けました。

誰が言つてもやめない、思念論という新説を認めてもらうことは祖父にとつては夢のことだったんです。

「おじいちゃん…？」

それから3年が経ち、私はまた祖父の研究室に入り浸るために祖父のもとを訪れました。

昼間だというのに光のあまり差し込まないその場所は、24時間いつもでも電灯のスイッチを入れなければ暗くて何も見えないはずなのに

疑問をかかえたまま、私は暗闇の中を記憶を頼りに進んでいく。壁に手をついて長めの廊下を進んでいく…そのうちに目が暗闇に慣れてきました。

「…？」

廊下を過ぎると祖父がいつも座っている机がある研究室が見える、いつもと同じような姿勢で祖父が座っていました。

しかし

祖父の頭は、机にベッタリと付けて横になっている。

変だ

祖父は研究熱心ではありましたが、机に突つ伏して寝るようなことはありませんでした。

「…っ!!」

暗闇に慣れた目で直ぐにわかりました。

血の氣の引いた祖父の顔、閉じたままで動かない瞼
おじいちゃん?と声をいくらかけてみてもなにも返事はない、動か

ない

「おじいちゃん!? ねえ、おじいちゃん!!」

そこからはあまり、覚えてないです

気がつくと私は喪服に着替えていて、おじいちゃんの入った棺が運ばれていく様子を見ていました。

疲れた様子の母と父とともに葬儀を終えて、家についた私は喪服から素早く着替えて祖父の研究室に戻るために、家の玄関へ向かう。

「ファリニス、どこへいくの?」

「…ちょっと、公園まで」

死んだ人の生前暮らしていた場所に行くなんて、おそらく父も母もいい顔をしてはくれないと想い…嘘をついて研究室へと向かいました。

そして、研究室に着くとそこには何人かの人間たちが祖父のいた机の前で何かを話しているのが見えてきたので…思わず廊下の隅で隠れて聞いていました。

「この研究室、どうするんだ？」

「さあな…日の当たらないようなじめじめした場所だ、誰も好き好んで使いやしないさ」「

「じゃあ、ここは取り壊しか」

取り壊しという言葉が耳の中に入ってきて、私は目の前が真っ白になりました。

祖父との思い出の詰まっているこの場所が消える、それは私にとつて耐えられることではありません。

「い…いやです！」

思わず私は研究室に入つて、大声で言いました。

「私が…私がおじいちゃんの、祖父の研究を継ぎます！この研究室は、私が使います！」

今思えば、この言葉はかなり無茶でした。

まだ大人になれててもいない私が研究室を使う…あまつさえ難しい思念論の研究を継ぐことなんて、いきなり現れた涙目の私の存在と言葉にその場にいた人たちは困惑してしまつていました。

それから、私はその人たちに連れられて自宅の方に戻りました。

父も母もその人たちから事情を聞いて、私が隠れて研究室に行つたことを知りましたが：祖父のことを慕つていた私をきつく咎めるようなことはなかつたですが、私が祖父の研究を継ぐということに関しては、父も母も反対しました。

「思念論は父さんはよくわからないがファリニス：お前も知つているだろう？」

「おじいちゃんの研究はほかの皆さんに任せて、ファリニス…あなたは別の道を…」

それでも私は諦められませんでした

絶対にあの場所を、研究室を譲りたくない壊されたくない

そのときから祖父にとつての夢は、私とつての夢に変わったんですね。

祖父のまとめた資料を読みあさつて、思念論を独自に研究して…

ひとりでも研究を続けてきた祖父を見習い、私はたつたひとりでも研究資料を読みつづけて、夜も朝もずっと…生前の祖父の字が書かれた資料を離さずに…

2年ほど経つた頃に、私はようやく生前の祖父の資料をすべて判読し理解に成功したのです。

最終的には父も母も根負けして、あの研究室をなんとか取り壊しにならぬようにしてあげると約束もしてくれました。

しかし、うまくはいきません

やはり研究結果をまとめても学会では認められないだろうと…私は、どうしたら認めてもらえるのだろう?と模索していました。

そうして研究の内容をまとめているうちに、私はあることに気がついたんです。

実際に思念を見るることはできない、つまり実物での証明ができないこの思念論…という発想から間違っているんじやないか?…と

私は祖父の研究の中に思念集合体の項目を見つけく思念集合体という固まつた存在になれば、通常の人間たちにも視認することができるだろう>と

思念集合体を、实物で学会に証明できれば…わたしはそう考えました。

生前の祖父がそれを実行に移せなかつたのは、年齢を重ねてしまいフィールドワークが困難になつてしまつたのが原因であると、推察しました。

「わたしなら…できる」

思念集合体を見つけて、それを学会で証明できれば…祖父の思念論を認めてもらうことができる！

その考えに至ったわたしはいてもたつてもいられず、直ぐにフイールドワークをするために準備を始めました。

両親は反対もせず、私の研究態度を認めてくれて…旅のために準備を手伝ってくれました。

それから、私の旅が始まりました…

「…うーん…なるほど…」

「…うーん…なるほど…」

ファリニスの話はだいぶ過去から遡つたものだつたが、その内容に感情的な部分が多くて理解するのにそんなに難しく考える必要もなかつたために追つてすぐに理解できた。

ファリニスのおじいさんが…口ケットの中の写真の笑顔からは想像できない、境遇だつた。

「それなら、尚の事急がないといけないな…おじいさんの研究室も、壊されるとかもしれないし」

「両親の説得もいつまでもつかもわからないですからね…でも、急ぐと疲れてしましますから…マイペースにいきましょう」

ホントは慌てたいだろうに、ファリニスは笑顔で取り繕うのがうまかった。

ギュッと口ケットは握り締めたまま、そんな様子からファリニスの気持ちが伝わって来るようだつた。

「じゃあ、もう休憩できだし…行こうか！」

「あれ、セグレトさん足はだいじょうぶなんですか？」

「へー！あ、いやもうだいじょうぶ！お茶飲んだら治つた治つた！」

クスクスと笑うファリニスは、今までの話の中で見せた暗い表情とはちがう

取り繕いの笑顔なのか、ホントの笑顔なのかわからないけど

それでも、今フアリニスが笑ってくれているならそれでもいいと

どんな笑顔でもいいと

おれは、そう思えた

第16話

「おっ、みえてきたぞ！」

休憩を終えてからの道中は何事もなく、マイペースと言いつつも無意識で急ぎ足になっていたのか・・・日がまだ高いうちに次の街が見えてきた。

すぐそばにある真新しい看板には〈鉄鋼の街 ルメタルシティ〉と書かれている…もう目的地は近い、目と鼻の先だ。

「ふう…あと少しですね…頑張りましょう」

疲れた様子のファリニスだが、ここまで来て休憩もなんだかもどかしい気分になる。

あと一息だ、とファリニスの意気込みに乗つてルメタルシティまでマイペース歩いていくのであつた。

カンカン：

硬くノックするような音が響く、しかしそれが聞こえているのは真

下：俺たちの足元からだ。

ルメタルシティの街並みが見えてくる門の手前まできた頃に、そんな音が響いてきた：足元を見ると、今までの土の道とは違い鋼鉄のような光沢のあるプレートがそこに敷かれていた。

「さすが鉄鋼の町…か？」

「こんなところに使うなんて…贅沢ですね」

恐る恐る門を見てみると、誰もいない：俺の住んでいた街と違い警備などはそれほど厳重ではなさそうだった。

パスポートを懐にしまい、俺はすんなりと門を通つて街の中に入る：ファリニスも同様に、俺の後から続く。

街へ入ると、目の前に広がつてきたのはせわしなく動く人たちの姿だつた。

皆わりとラフな格好で、特に長袖のシャツを着てダボダボのズボンを履いた：いわゆる鳶職に勤める人のような格好の人が多い。

「工事中…なんでしょうか…？」

「いや、まあ…どうなんだろう？」

俺たちはとりあえず…この街を詳しく知るために、門のすぐそばにあつた観光案内のパンフレット置き場から、2冊のパンフレットをもらい読んでみることにする。

ゆつくりくつろげるスペースがないために立ちっぱなしでの黙読
だが…贅沢も言つてられない。

「工業の栄えた街…なんですね…」

「そうか…それであちこち工場だらけなんだな」

上を見上げてみると、煙突から煙の上がる大きな建物がチラホラと
見える。

おそらくあれが全部工場つてことなんだろう…と納得する。

そしてそのままパンフレットを読みすすめていると、ファーリニスが
横で地面にお尻をついてしまった。

「あいたた…」

そう言つて手を当てた場所は、おしりの方ではなく足の方だった。
かなりの長距離を歩いてきたんだから無理もない、俺は観光案内パ
ンフレットの中に休める場所がないのか探してみることにした。

「ちょっとまつてろ…お、いい感じのカフェが近くにあるみたいだぞ
？」

「じゃあ、ちょっとそこに行きませんか…？もう足が棒になつてしまつて…」

そうしようか、と俺はファーリニスの持っていた分の荷物を持って、

パンフレットを頼りにそのカフェの場所まで歩いて行つた。

荷物を持つてない分楽だらうけど、ホントは椅子にでも座つてゆつくり休みたいはずだしな…なによりも、俺もまた休憩したい

「重くないですか？」

「だいじょうぶだいじょうぶ、地図見るとすぐそこっぽいし！」

近くの、と言つたように街の入口からさほど離れていない場所にそのカフェはあつた。

あまりお客様のいない静かなカフェみたいだ…ひと目も気にしないで、ゆつくり出来そうだなど、俺は内心喜ぶ。

荷物に手を取られてドアが開けられなかつたが、ファリニスがススつと移動してドアを引いて開けてくれた。

「さんきゅ…」

「いらっしゃいませ、何名様でしようか？」

カフェに入ると、少し年の言つた中年男性が俺たちの前に駆け寄る、名札を見るとカフェのオーナーらしい。

二人です、とファリニスが答えるとオーナーは荷物をチラチラと見てから 奥の席へどうぞ と笑顔で案内してくれた…奥の席は右手側に窓があつて、片側がソファー、もう片側が普通の椅子になつている席だ。

「お荷物の方は、ソファーの上においてくださつて構いませんので…」

「あ、どうもありがとうございます」

オーナーの言葉通りに、俺はソファーの上に大きな荷物二つ、その上にファリニスのカバンをひとつ置いた。

重たい荷物から解放されてふうっと深めのため息をついてから、俺は椅子の方に勢いよく腰を下ろす。

「すごいところですよね…ルメタルシティ」

ソファーの方に座つたファリニスが、窓の下を見下ろしながら言った。

俺も窓の下を覗き込んでみると、さつきと変わらずにせわしなく動いているゴト着（薦職の人たちが着てる服）を着た人たちが見えた。汗を流しながら急ぎ足で動いてる姿は、一種のカツコよさも感じるような気がする…と、ここでオーナーがお冷を持つてテーブルまで來た。

「ご注文は、お決まりでしようか？」

「あ、ごめんなさいまだ考えてなくて…」

ああ、大丈夫ですよとオーナーはテーブル脇に差してあつたメニュー表を手にとつてファリニスと俺の手元に置いてくれた。

こちらがオススメのメニューです、と最初のページを開いて商品を案内する。

「お二人は旅の方…でしょうか？」

「えつ？」

「いや、失礼しましたこんな街に観光に来られる方も少ないもので…」
ハハハ

オーナーの話によれば、門に近くて観光客をメインにした店舗の作りにしているそうなのだが…観光客自体があまりに来ないので、年中閑古鳥が鳴いているとかなんとか

片隅にオレンジ色の髪の女性も見えるが…そういうお店にも常連のひとりやふたりはいるもんだろうか。

「大変ですね…あ、わたしはコーヒーでお願いします」

「ん…じゃあ、おれも」

かしこまりました、とオーナーは厨房の方へと下がつていった。

「観光客のかあ…たしかに、そんな気分で来るような雰囲気の街でもないですよね…」

「こんなところに、思念集合体なんているのかつて感じだよな…ん？」

お冷を口に含んでから、少し疑問に思つて眉をしかめた。

水は何もなく澄んだ色で味もおかしくない：俺がふと疑問に思つたことは、思念集合体の話だ。

「思念集合体って、どうやつてみつけるんだ？ 前は俺の方によつてきたからいいけどさ、こんな広い街の中で探し回つて見つかるもんなのか…？」

パンフレットを見る限り、この街は広くて裏路地なんかも様々にある、思念集合体の形状から察するにどんな場所にも忍び込んだりもできそうな感じがした…そんな奴らを見つけることができるのだろうか？ と

それは問題ありません、ヒファリニスは一番上の自分のカバンからゴソゴソと何かを取り出す…

「…瓶…？」

自動販売機で売っている缶のジュースとおんなじぐらいのサイズ

の瓶だった、中身は透明で何にも見えない…

と思つたら、薄一く青色の膜が張つたようなものがうつすらと見えた、大きさで言えば非常に小さく、塩の小さじいっぱいと同じかそれよりも少ないかだ

「これはセグレトさんを襲つてきた思念集合体のかけらです、今は無力化して瓶の中に封じ込んでます」

「えっ、これが…あの？」

前回襲つてきた思念集合体のかけらと言つたそれはまったくうごかない、無力化と言つたようにまつたく恐怖感も何も感じない…それどころか動きもしない。

「思念は他の思念と寄り合つて集まる習性があるんですが、それを応用すれば近くに別の思念集合体がいれば、この瓶の中で反応を示すはずです」

「なるほどな…こいつが、道しるべつてことか」

「瓶からだしちゃダメですからね、こんな状態でも危険ですから！」

「あんた…」

「！」

気がつくと、俺の背後には先ほど見たオレンジ色の髪の色をした女性が立っていた。

表情は険しく足音は聞こえなかつた・・・気配も消していたのかとも思える程に

背後の女性は、表情を変えないまま腰に当てた手を

素早く太ももに下げていた拳銃を引き抜き、俺の額に銃口を当てる。

「つ!?」

銃口を額に当てられる経験なんてあるはずもない、動搖を隠せない。

険しい表情のその人は、指をしつかりと引き金に引っ掛けている…

「油断してるねー・・・あたしが少しでも力入れて引き金引けば、あんたの額に風穴開くよ?」

状況がよく飲み込めない…一体、なんでだ!?

この女性には見覚えがないし銃口を向けられるようなことをした
おぼえもない、何よりもこの街に来たこと自体が初めてだ、知り合い
なんているはずがない

「あの、どちらさままで…」

「さあて…ね、あの世の閻魔様にでも聞いてくる?」

いつたい

なんだつてんだ…!?

第17話

「待つてください！私たちはっ…」

「待った、あんたもみたところコイツの仲間かなんかでしょ？これはあたしと…こいつの間だけの、当人同士でしか解決できないことさ」

当人と言つて、俺の額に当てていた銃口をグリグリと押し付けてくる…微量ながらも、火薬のような匂いがする。

こいつの銃はモデルガンなんかじやない、間違なく本物の…使用されて間もない、本物の銃だ。

「当人つて…私たちは、この街には来たばかりですよ!?」

「ハツ！笑わせる…正直に言えばいいもんを…ねえ」

だめだ！ファリニスの話も俺の話も聞いてはくれそうにない、完全に俺たちとは関係のない話のはずだけど、目の前のコイツは完全に俺を関係者だと誤認してしまっている。

このままだと引き金を引かれるのも時間の問題か…冷静に考えろ、このままじゃ俺の頭に風穴があいて、旅の始まりで人生が終わる。

ならもう、選択肢は

「ひとつ！」

俺はファリニスに気を取られたままの奴のスキについて、頭を下げてから素早く銃身を掴みにかかりた。

不意打ちで行つた行動のため引き金を引かれる前に銃身を強く掴むことができた、目の前の奴が混乱しているうちにと俺は強く握った銃身の銃口をそのまま上に持ち上げて天井に向かせた。

パンツと軽い発砲音の直後、天井のインテリアの一部である洒落た電灯のガラスがパリンと割れてテーブルに降り注ぐ、俺たちの体にはなんとかガラスを飛んでこず安全だった。

「キヤアッ!?」

「こいつっ！」

掴まれたままだつた銃身に手をかけ、彼女は力いっぱいに俺の手を振りほどく！

女性とは思えないほどの力が伝わってきた、銃身を力いっぱい掴んでいたはずだか奴の力には敵わず、無念にもその手の離してしまつた。

オレンジ髪のそいつが、銃を手元に戻し後退してから…改めてこちらに銃口を向けた、距離は2mといつた具合か

「あんたの言つてること、さっぱりだ！この街に来たのも初めてだし、あんたと顔を合わせたのだつてこれが初めてだ！」

知つてる限りの事実を話す、これしか俺にはできることだ…コイツに伝わるとは思えないけど、正直こんな言い訳にしか聞こえないことをしか言えない。

ファリニスは黙つたまま、俺の背中に来ている…隠れているわけ

じゃなく、万が一何かしらに備えているような…そんな空気を感じた。

「ヽヽヽまでしておいて、まだシラを切るつもり！反撃してきたってことは、あたしだつて黙っちゃいられないよ！」

銃のマガジンを抜き、再装填、弾切れを起こすことのようなアクションは期待できなさそうだ。

銃口を三度向けられて、俺は…

とつさに大きく腕を広げて、ファリニスの壁になる

「俺はまつたく関係ないけど、撃つて気が済むなら撃てばいい！ただ…ファリニスを傷つけるのだけはやめろ！」

「セ…セグレトさん!? それは…！」

ファリニスの言葉を制して、俺は自分の言葉を続ける。

「あんたもいったよな、〈これは当人同士の問題〉って…なら、あんたの言う当人が俺なら、ファリニスは関係ないはずだ！」

「…！」

銃を構えたまま、そいつはハツとした表情を見せる。

俺は動じない、動けば：また、ここで逃げたら俺は、俺の心が死ぬからだ

逃げるわけには行かない！

命を助けてくれたファリニスを、いつだって俺が助ける！

「そこまでです、お一方」

「！」

俺でもない奴でもない、ファリニスでもない声が聞こえた。

それは少し前に聞いたような声、俺の左隣から聞こえた…ん?

までよ?俺の左隣は…壁だ、壁から声?んなわけない…

じやあ、壁の向こうから?

壁の向こう側は…キッチン、厨房だ

「特にルゼフィア…何をしてるんです?」

カウンターの奥から、カフェオーナーがさつきと変わらない表情で
ゆっくりと出てきた…その表情で眼差しは俺たちではなく、ルゼフィ
アと呼ばれたオレンジ髪の彼女に向けられている。

そんなオーナーの姿を見て、銃をサッと素早く下げて焦ったような
顔を見せ始めた。

「えつと、お、おおおオーナー!いやこれはその…」

「店のライトをひとつ壊して…お客様に迷惑もかけて、どういうつも
りだと聞いてるんです」

ビリビリ…と、なにかいやな感覚が伝わって来るのがわかる…。

「セ…セグレトさん…」

「ああ…なんとなくわかる」

只者じやない…今まで威勢の良かつた彼女が、あんなに萎縮してしまつてはいるし…なにより空気がガラリと変わった。

あのオーナーがカウンター側から出てきて言葉を発してからだ、張り詰めるよりも、鋭く尖つた…居心地の特に悪い感覚だ。

「割れたガラスを片付けなさい、話はそれからです」

「は…はいいつ！」

あわててルゼフィアはカウンター側に向かっていき、ガタンゴトンと激しい音を立てながら箒とちりとりを慌ただしく持つてきた。

そして、テーブルクロスを引いて床に落としてから、ササツとほうきとちりとりを使って掃除し始める。

「しつかりとやりなさい…ああ、お客様の方はお怪我は？」

「へ？あ、ああ…いや、なんともないですよ」

もうちょっとでピアス穴よりもでつかい穴が頭に空きそうだつた
けどね、とか思つたけどそれを想像すると嫌な気分になるので、まあ
：口に出すことはなかつた。

飛び散つたガラス掃除をせつせとしているルゼフィアをよそに、俺
たちはオーナーに案内されるがままに、カウンター奥のスタッフルー
ムへと案内されていった…。

第18話

「…ふう、美味しい」

あれからしばらくして俺たちはスタッフルームの中で注文していたコーヒーを飲んでいた、まだ熱く香ばしい香りを放つそれは先程までの張り詰めた空気から気持ちを和らげてくれる

俺はステイックタイプの砂糖をひとつ袋…そして、ファリニスは同じくひとつ袋の砂糖と一つのミルクを入れて飲んでいた…が、すこし顔をしかめている。

「あの…めんなさい、もうひとつお砂糖もらつてもいいですか？」

「おおつと、かしこまりました…すぐに持つてまいりましょう」

どうやら苦いのは苦手らしい…

スタッフルームの真ん中にある黒いテーブルの上にカップをおいて、ファリニスはふうとため息のような声を出した。

「コーヒー…苦手なのか？」

「あんまり飲んだことなくて…あはは」

「さて…では、じつくりとお話の時間としましよう」

オーナーが砂糖を持ってきてしばらくして、ルゼフィアが戻ってきた。

：その頭には大きなたんこぶができていたが、まあ…何があつたかあまり詳しく聞かないことに。

ガタガタとロツカेに掃除道具をしまいこんで、オーナーはルゼフィアの隣に座つた。

「……あたしはわるくないよーだ」

「ルゼフィア？」

ムスつとしたままで否定の言葉を俺たちに言った。

ふたたび空気が張り詰める…が、ルゼフィアも気にせずにツーンと

している、そしてそのまま彼女は話を続けた。

「あたしのターゲットを奪つたほうが悪いのは、決まってるじゃん！
あたしは悪くないよ！」

「ここだ、よくわからないのは
ターゲットって意味もよくわからないし、それを奪うつて意味もよ
くわからない…怪盗かなにかなのか?
しかし関わりを持つたこと無い以上、俺とは無縁な話のはずだ、誤
解を解かないとな。」

「セグレトさんも私も、この街にはきたばかりなんです、勘違いとしか
…思えないのですが」

「いーや！あたしにはわかるよ！その頬の赤い模様がしょーーー！」

ビシツと、俺の顔に人差し指を向けて自信たっぷりの表情を見せ
た。

俺の頬には赤い模様が生まれつきあるが…これが、証拠？

「やはり…ルゼフィア、のことですか」

オーナーは、なにか事情を知っているようだ
そもそもルゼフィアのことをオーナーは前から知っているよう
だつたし…今回俺が襲われた原因も、わかつている？

「彼らは旅の人ですよ、事前に私も話を聞きましたし…なによりこの
お店にいることが、証拠でしょう」

「でもでも！あの赤い模様！まさに聞いたとおりだよ、あたしのター
ゲット奪つていったやつ！」

「ちよつと…ちよつとまつた！ ターゲットつてそもそもなんのことだ！？」

その俺の言葉のすぐ後に、ルゼファイアが俺に向かってなにかの手帳を突きつけてきた。

パスポートとは違った色の、真っ青な手帳で表紙に英語で〈BOU NTY HUNTER〉とかかれている。

「ば…バウンティハンター…？」

「そう、あたしもバウンティハンター！ あんたと同じく、賞金首をとつ捕まえてがつぱり生活費稼ぐ賞金稼ぎ…ま、あんたのせいで今月の食事代すら危ういけどね」

「俺と同じって…俺は、バウンティハンターなんて、全然知らないぞ？」

「白々しいね！ あんたのその頬の模様がなによりのしょーこ…目撃証言だつてあるんだから！」

と、いうと彼女はメモ書きを一冊取り出して、ペラペラとめくつてから書かれている文章を朗読する。

「〈現場には、頬を真っ赤に染めた容疑者とみられる男性が立ちすく

んでいたが、直ぐに立ち去つた〉…つてね！」

（まるで、恋愛漫画の描写みたいだな…って、そんなこと考へてる場合じやないな）

メモ書きは誰かの言葉をそのまま書き写したものらしい…言葉遣いから察するに、警察だろうか？

たしかに俺の模様のことを行つてゐるようにも聞こえるけど…真つ赤に染めた…頬？

「その、現場つて…どんな状況だつたんだ？」

「あんた当事者だし、しつてるでしょー…まあいいか」

面倒そうに椅子に腰をかけ、足を組んでから話を続けた。

「ひどいもんだね、あんな血みどろで凄惨な現場見たことないよ…路地裏の行き止まりの壁には血が飛び散つて真つ赤…地面も血が滴り落ちて真つ赤…3人も犠牲者でたらしいけど、あそこまで血が出るもんかね、つて思つたよ。」

言葉の上からでもわかるほどの、ひどい有様だということがわかつた。

その後にオーナーが事件の補足をしたが、この事件が起こつたのは

つい3日ほど前で、その犠牲者の中にルゼフィアの狙っていたターゲットの賞金首がいたらし…チャンスをうかがいながら追跡していたルゼフィアが少し目を離したすきに、すでに犠牲者はひどい有様だつたという。

「それは…ひどい、事件ですね」

「ええ…あなたたちは今日この街にこらしたのでしょうか？私のお店に来るのは大抵、初日に街に来られた旅のお方ですから」

「でつ…でもさ！頬に赤の色を持つて…」

「それなんですが…ルゼフィア…さん？」

なに？とすごい剣幕で振り返るルゼフィアにファリニスは若干ビクビクしながら、なるべく気丈なふるまいをしようどこほんと咳払いしてから、気持ちを切り替えて話を続ける。

「頬の赤い色つて…その、<返り血>のことじゃあ…？」

「あ、なるほど」

「いや、軽つ!!?」

先程までのすごい剣幕が消え、ルゼフイアの顔が明るくケロツとした顔つきに変わった。

「パスポートの入街日付も確認したし、ほんとにあんたらじやないんだね…はあ、なんだよお…紛らわしいマーク付けちゃってさあ」

ぐに一つと、俺の模様のついた方の頬をかなり強めにつねる、正直かなり痛い：

さつきのゴタゴタの時に銃の取り合いをした時には、華奢な体つきの割にはかなりの筋力の差を感じた：男女の差をもろともしないような感じだった。

「やめなさい、ルゼフイア…申し訳ありません、うちの関係者がお客様にご迷惑を」

オーナーに制され、ルゼフィアが俺の頬から手を離す。

「関係者? というと…オーナーさんも、バウンティハンターを?」

「ああ、いえ私は…そうですね、管理者と言つたほうがよろしいでしょ
うか」

そういうとオーナーはスタッフルーム内のテーブルから、なにかの
ファイルを取り出す、厚さはかなりのもので国語辞典ほどあるんじや
ないかと思われるほどだ。

その分厚いファイルをフアリニスが受け取り、ペラペラとめぐり始
める…なかに挟まれた紙には、顔写真を貼り付けた〈WANTED〉
と大きく書かれた紙のようだ…。

「これって…みんな、賞金首?」

「ええ、わたしは賞金稼ぎ…もとい、バウンティハンターの依頼を管理
する立場です、このお店も元々は、バウンティハンターの為の交流の
場として設立したのですよ」

「そもそもバウンティハンターというのは、この世の指名手配を受け
た犯罪人を捕獲、あるいは始末を担当するお仕事…というのは、察し
ができますか?」

その仕事内容は、毎日私のもとへこのような紙の手配書として届くのですよ、といつても様々な地域の手配書が来るので…ルメタルティ付近の手配書のみ、そのファイルにまとめているのですよ」

「はえー…なるほどなあ」

「んであたしは、オーナーのそのファイルを見てどの野郎をとつ捕まえるかを決める…って感じ、体も動かせてお金もがっぽりない商売！ってなわけよ」

銃をくるくると回してルゼフィアは一枚、ファイルから手配書を取り出す。

そこにはバツマークの書かれた、ある初老の男の写真が載せられて
いる…とおもつたら

ルゼフィアは思い切り、その手配書をビリビリに破いてしまった。

「あたしは一刻も早く、横取り野郎を探さなきやいけない…この街に
どこかに、まだいるはずだからね」

「もしかしてその凄惨な事件は、まだ起こり続けて…？」

「ええ、実は…一昨日と昨日と、一日連続で」

犯行手口が全く同じ、そして現場も似たような路地裏…とオーナー

は話す。

獵奇的な手口を続けている犯人の思考が読めず、おそらく愉快犯の犯行であろうと、警察も判断しているが：一向に手がかりもないという。

「よーし…じゃあセグレトつていったつけ？」

「うん？」

「犯人探し、手伝つて」

え

「えええええええええつ!?」

俺とファリニス、二人の絶叫がスタッフルームに響いた。

第19話

賞金稼ぎ、バウンティハンターのルゼフイアのターゲット横取りの容疑が、すっかり晴れた：

が、ルゼフイアからの思わぬ申し立てでまた問題を生むことになった。

「あんたには、あたしの犯人探しを手伝つてもらうよ！」

犯人探し、つまりここ最近の事件の犯人と一緒に探せということだ、当然ながらもともとこの街に来たばかりで関係のなかつた俺は、強く否定する。

「ちよ…ちよつとまつてくれよ、疑いも晴れたろ!?なら…」

「あたしさ…むしょーに、腹が立つてるわけよ」

ルゼフイアが強く拳を握り、ギリギリと音を立てた…かなりの握力がかかるつているのが、見て分かるほどだ。

言葉から察するに彼女にとつては賞金首を捕まえることは仕事であつて、生活の基盤を支える重要なものだろうし、その怒りは共感できる。

「だからさ、その頬の赤い印を見ただけでなんかこう…引き金引い

ちやいそなんだよね」

…怒りの矛先にはまったくもつて共感できなかつた

「だもんで、あんたがあたしと一緒に行動すれば間違えることもなくなるつてわけよ！あんたたち、しばらくこの街にいるんでしょ？」

「まあ、そうですね…」

代わりにファリニスが、メモ帳を見ながら返事をした。

そのメモ帳にはスケジュールでも書いてあるんだろうか？

「だつたら、ほら、もう一緒でしょ？」

「〈引き金引いぢやいそなんだよね〉つて言つてる人と行動するの
こええよ…」

「だーいじょうぶだいじょうぶ！一緒にいればまあたぶん我慢できる
できる！」

「そこは強く確實に否定しろよ！」

あの店内でのゴタゴタ時は、命の危険が目の前にあつたからか、あんまりビビリはしなかつたけど……今になると怖い。

一步間違えれば脳天に風穴空いてただろうし……前の思念集合体の時よりも現実味があつて恐ろしい。

そのとき、店の方から誰かが扉を開ける音が聞こえる。

オーナーは素早く席を立つてスタッフルームから顔だけ出して店内を見ている……おそらく、客が来たんだ。

確認してからオーナーが素早く店内に駆け出していった。

「おつと……」までかな？この店、あんまし客は来ないけど細かいこと気にするオーナーだからさ……場所を移そうか

「そうだな、もともと従業員でもないわけだし……ファリニス、足は大丈夫か？」

「はい、大丈夫です……！」

立ち上がろうとしたファリニスの足がガクンと崩れた、見てみると左足を庇つて体勢を崩したようだ。

大丈夫か？と、俺は駆け寄つて体制を低くしてファリニスの顔を見る……なんだか痛そうにしている。

「どうした？足、まだ痛むのか……？」

「鋭い痛みが足の裏に…いつ！」

ファリニスが自分で靴を脱いでみると…一筋の赤い液体が、足から流れている。

赤い液体は足の裏のちょうど真ん中あたりから流れているようで、そこにきらりと部屋の明かりで反射した透明なガラスが刺さっている。

「さつきのガラスが…」

「ありや…ごめんね、救急箱あるかオーナーに聞いてくるよ」

「ああ、頼んだ！」

店内に出たオーナーを追つて、ルゼフライアがスタッフルームから出て行く。

残った俺はファリニスの傷口から流れている血を止めるために、近くのティッシュボックスから荒々しく紙を取り出して、傷口になるべく触れないように血を染み込ませる。

「…んっ」

ピクンと、ファリニスが体を震わせた。

「わるい、痛かつたか!?」

「あ、いえ…違う…じゃなくて、あの…やっぱり…痛かつたです」

「…
??？」

よくわからなかつたけど、流れ出した分の血はあらかた拭き取れ
た。

クシヤクシヤに丸めてゴミ箱に投げ入れたあと、またティッシュ
ボックスから一枚だけ紙を取り出してファリニスに手渡した。

「あとはこれで抑えておけば大丈夫…かな?」

「はい…その、ありがとうございます」

心なしか、少し顔を赤らめているようだけど…

そのとき扉が慌ただしく開いた、見るとルゼフライアが救急箱を抱え
て息を切らしている。

「はあつ…はあつ、なかなか見つかんないもんで、遅れた！」

「お、じやあさつそく消毒を…」

「じ、自分でやりますね！私なれていますから！」

頬を赤らめたままで、ファリニスは勢いよく救急箱を受け取るとそそくさと傷に消毒液をあてがうのだった。・・。

第20話

ファリニスの足を治療を終えてからほどなくして 場所を移そう
というルゼフィアの提案に賛同して俺たちはカフェを後にした。
ファリニスの足の傷はまだ閉じてない、治療したばかりで無理をさせたくないが、大丈夫ですよ！ という彼女の強がりの含んだ言葉を尊重してゆっくりとしたペースで道を歩いていく。

「ここの公園でもいい？」

ルゼフィアの指さした方向には、少々小さいがベンチの設置されている休むには十分なスペースのある公園だつた。

足をかばいながら俺の後ろをヒョコヒョコとついてくるファリニスを気遣いながら、俺たち3人は全員公園のベンチに腰掛けた。

「しつかし…あなたたちも、こんな時代に旅なんてよくやるね」

左端で足を組みながら、ルゼフィアは気さくに話しかける。

長いスカートをベンチに挟んで、裾を地面に付かないように…なにげない場所にも気配りができているし、粗い性格だとも思つたけど、意外と細かいところもあるようだ。

「旅っていうか、研究の為のフィールドワーク…って言つてもそんなに変わらないか」

「かわりますよー！バツクパツカーチの方々とは目的も全然違いますから！」

ベンチでゆつくりと座つて談笑する、時間にして20分ほどだっただろうか？主にルゼフィアからはこの町の話を、俺たちからは俺とファリニスが出会った時のこと話を話していた。

思念集合体やらポケモンという種族の存在、という話は伏せて…だが

「じゃあ、ルメタルシティは発展途上の街なんですね」

「そういうこと、元から建築関係だの土木だのって仕事が多いみたいだけど…ま、あたしはそういうのは苦手でね」

バウンティハンターで賞金首を捕まえる仕事のほうが俺にはキツそうだけどな…という言葉を飲み込んで、おれは話を聞く態勢に戻す。

「発展途上の街つて警備も大変らしくてね…あたしはよくわかんないけどさ、なんか賞金首もこういう忙しい街に入りたがるとかなんとか」

「そういうもんなのか…」

「それはそうと、なんか飲みたいもんある？」

公園のすぐそばには、自動販売機があつたようだ、自分の小銭入れをポケットから無造作に出して中身を確認。

…見ただけでなんとなくわかる、重量感があるというかなんというか。

「おれはなんでもいいかなあ…ファリニスは？」

「え、あ、えっと…サイコソーダで」

俺が話しかけた時、ファリニスは口元に手を当てて考え方をしてい
る仕草をしていた。

なにか引っかかることでもあつたのだろうか？とルゼフイアが公
園入口の自動販売機まで行くために席を外した時に、こつそりと聞い
てみた。

「…なにか気になることでもあつたのか？」

「ん…いえ、そんなに、大したことじやないんですけど…」

「賞金首を狙つて稼いでる、バウンティハンターのいる町にわざわざ
狙われる危険性の孕んだこの街にやつて来るっていうのも変じやな
いですか…？」

「あ…でも、ルゼファイアの言うように警備がザルつてことじゃないのか？それを狙つて…」

「どうなんでしょう、もしも私が狙われる身ならこういつたバウンティハンターの本拠地のなさそな道端で生活でもしてそうですが…」

たしかにファリニスの言うとおりなのかもしれない

俺たちがルメタルシティまできた道のりでも、鬱蒼と茂った森の中にテント張つて生活だつて出来そうなものだ、森の中に食料でもあれば…だけれど

「街の中にいないと生活ができないんじやないか？賞金首も一度狙われれば、職に就くのだつて難しいだろうし」

「賞金首になるほどの人が、普通の職につこうとするものなのでしょうか…偏見かもしませんけど…うーん…」

まあ、偏見かもしれない

でもファリニスの意見に俺は大した否定もできなかつた、なんとかく彼女の疑問があたつているような気がした。

「ルメタルシティに何かあるつてことか…？」

「かもしません、そしてなにより」

ファリニスはカバンからゴソゴソとひとつつの瓶を取り出す、それはカフェの中で見せてくれた思念集合体のかけらだつた。

手のひらに垂直に置いて、俺の目線に合わせて瓶を静止させる。

…！

よく見ると、微弱ながらも小刻みに揺れていた。

瓶自体に振動が伝わつて小さいながらもなにかに反応するよう、小さく激しく

「思念集合体が…ファリニス、まさか」

「おそらくは、いえ…ほぼ間違いなく」

「思念集合体つてなに？」

「！」

話に夢中になつて気がつかなかつた、ファリニスの背後にはいつの間にかルゼフイアがサイコソーダを3つ持つて立つていた。
いつからいたのかわからない、つい思念集合体と会話に集中しすぎていた。

「なになに？あたしも混ぜてよ！」

にこやかな表情で話に加わろうとするルゼフイアはふたたびベンチの端に座つて、持つていたサイコソーダのうちの二つをベンチの端において残りの一つの蓋を開ける。

プシュッという爽快な音を聞かないうちに、ルゼフイアは一気にジュースをあおつた。

「…話しても大丈夫か？」

「ホントはあまり他言できない内容なんですけど…この場合は、仕方ないですね」

「おつ？なになに秘密の内容つてやつ？あたしそーいうの大好きだぞ！」

そう言つてルゼフイアが残り2本のサイコソーダを俺たちに渡す、そして自分のサイコソーダを勢いよく飲み干してから、俺たち二人と向き合う。

ファリニスがコホンと言つてから、思念集合体の話やファリニスの祖父の話を始める。

「ふーん…なるほどねえ」

クルクルと右手で飲み干したサイコソーダの空瓶を上に投げてはキヤツチ、また上に投げてはキヤツチとしながらファリニスの話にうんうんと頷く。

空瓶を一度も落とすことなくそれを続ける彼女の器用さが伺える
：それともう一つ、俺とファリニスは思っていたことがあった。

「意外に、驚いたりしないんだな…」

思念というものが頭の中にある、乖離した思念が地に帰らずに集まつて化物になる。

非現実的な話だ、俺の時は実物が目の前で暴れてたり死にかけたりしたこともあつてまだ信憑性もあつたけど、彼女は驚きも動搖もせずにジャグリングするかのように瓶を回し続けている。

「いやあ、事実は小説よりも奇なりなんて言葉があるくらいだしさあ、あたしの知らないことが世の中にはたくさんあるつてわかってるからね」

そこまで言い切つて、ルゼフィアは回していた空瓶を受け止めてブンとそれを投げる。

投げた先にあつたゴミ箱に綺麗な放物線を描いてから、空瓶は見事にゴミ箱の中へと吸い込まれるように入った。

「あたしのわかんないことをあたしが考えたつて、答えなんて出るわけないからね！その思念なんちやらの話は信じるよ！」

「ありがとうございます、ルゼフィア……さん」

呼び捨てで言いかけたファリニスがあわてて付け加えるが、ルゼフィアがチツチツと指を左右に振つている。

「あたしらは一宿一飯を共にするから、呼び捨てでいいよ！代わりにあたしもあんたたちのこと呼び捨て、それでいい？」

カフェの時とは違い、彼女はもう怒っていない。

普通の状態の彼女は気さくで明るい、柔軟な考えを持つた立派な女性だった。

「俺は全然構わないよ、ファリニスもそれでいいか?」

「…はい！ようしくお願ひします、ルゼフイア」

敬語も抜きだよー、というルゼフイアの言葉が公園内に木霊した

「つて、一宿一飯？」

「ああ、二人共あたしの家に招待しようかなと思つてね！」

「…ええつ!?」

俺自身の驚く声も、公園内に木霊した。

第21話

思念集合体の話をひとしきりルゼフィアに話したあと、ルゼフィアの部屋に招くという言葉に過敏に反応してしまい大声を上げてしまった。

「ど、どうしたんですか？急に大声出して…」

「へ、あ、いや別に…」

よくわからない、という顔でファリニスは俺の顔を覗き込む…あわてて俺は平静さを取り繕つた。
しかしルゼフィアを見てみると…頬に手を当ててなにやらニヤついている。

「ははーん…ウブだねえ」

「う、うるせつ！」

ルゼフィアにはわかるのか、まあ…俺は昔から女性の友達とか、ましてや彼女なんてのもいたことがない。

つまり当然ながら女性の部屋に招かれるということが人生初ということだ、ついこの出来事に俺は過剰な反応をしてしまった。

??
?_?

ファリニスには悟られてないだけましか：：と、俺は彼女の未だに理解していないような顔を見て安心するのだつた。

「おつかれさま、ここがあたしの家だよ」

公園から20分ほど歩いた先に、ルゼフィアの住む場所があつた。駅周りの喧騒した雰囲気の場所から離れており周りは静か、彼女の住む住宅街の中は駅とはうつてかわつて閑静なものだつた。そしてなによりも、俺たちが驚いたのは：

「で…でかいな」

「ですね…」

ファリニスを背中に背負つたまま、俺は頭を上にあげてその建物を

確認した。

住宅街には2、3階建てのマンションやら一軒家などが多く並んでいるその中に似つかわしくないような高い建物…いちいちベランダの数を数えていくのが億劫になるほどに、高くそびえ立っていた。

俺たちが圧倒されている間にルゼフィアがサラサラっと入口の方でポストを確認している、そして鍵をちらつかせながら俺たちの方に戻つてくる。

「おまたせ〜、じゃああたしについてきて！」

と言つてルゼフィアはさっさと入口にまた戻つていく、俺はファリニスを背負つたまま彼女のあとをついていく。

二重に設置されていた自動ドアを通り、その奥にある既に待機していたエレベーターへと入る。

エレベーターはすぐに動き出し、ゆつたりとした動きで上へと上がつて行き…15秒もしないうちに、目的の階へとついたようだ。

「わあ…高いですね」

エレベーターを抜けた先に、高所からならではの景色が広がつてゐる…ルメタルシティの住宅街を一望でき、その爽快感を俺とファリニスが味わつた。

夕方になつて赤く染まつた空を見てから、俺は再びルゼフィアの後を付いていく。

「ルゼフィアって…お金持ち？」

「ぐつふつふ…ドヤ?」

「腹立つなその顔」

そんなことを言いつつ、ルゼフィアは自分の部屋の前で鍵を差し込んでくるりと回す。

カチヤンと耳心地のいい音と共に鍵が外れ、ドアノブを回すと扉はスーっと静かにひらく。

「さ、汚いけど入つて入つて！」

「お、お邪魔するぞ」

若干緊張する、20分間歩いているうちに幾分か落ち着いたけどやはりいざ入るときには緊張する。

(汚いって言つてたな、なら俺の部屋とそんなに変わらん変わらん)

と頭の中で俺の部屋を連想しつつ…通路を静かに進んでいった。

「汚…いのか？」

部屋についた第一声だった、驚きながらも俺は着いてからすぐにファーリニスを近くのベッドに座らせる。

ベッドがあるからここは寝室か…と、すこし辺りを見渡してみる、クローゼットやらタンスやらテレビやら、家具も家電も綺麗なものが置いてある、机にすこし資料のようなものがあるだけで、ほかに目につくところはない。

どこが汚いんだ？と、俺は頭の中で疑問に思つた。

「あちゃあ…まいつたな」

そんな声がすぐに聞こえてきた、今俺たちがいる寝室とは違うかを挟んで向かい側にあるこれまた広い部屋からだ。

ファーリニスを部屋に残して、俺はルゼフィアのした声の部屋に行つてみることにした。

「なんかあつたのか？」

「いや、本気で冷蔵庫の中が空っぽだったの忘れててさ…今日の晩御飯、買つてこないと…」

開けている冷蔵庫を見てみると、少しの食材を残して確かに空っぽ

だつた。

ふうく、と長いため息をついてからルゼフイアは台所そばのテーブルに置いてあつた財布を手に取ると、その中身から紙幣を2、3枚取り出して俺に渡した。

「お、くれるのか？」

「なわけないでしょ、近くにコンビニあるからそこで弁当買って」

「ああね…ん? ルゼフイア、たしかお前カフェで」

（今晩のメシ代にも困つてなかつたか?）

「つて感じのこと言つてなかつたか?」

自動販売機の時も、今この時も財布の中身は重々に入つているように見える、というか中身がチラつと見えた。

とてもじやないがお金に困つてるようには見えないほどの量なのが、ひと目でもわかつた。

「ああ、あれ? ちょっとした脅し文句みたいなもんだよ! さっすがに

そんなに無計画な女じやないつて！」

と言つて、財布をポンと机の上の戻したルゼファイアはグイグイと俺の体を押して玄関まで強引に連れて行く。

押されながらも預かつた紙幣を落とさないよう気をつけながら、俺は玄関まで押されていった。

「セグレトさん、どこかにいくんですか？」

ひよこひよこと玄関の方まで顔を出しに来たファリニスが、俺とルゼファイアを交互に見てから聞いた。

手に握っている紙幣をチラつかせながらちょっとそここのコンビニまで、と答えると頷いて納得した。

「セグレトさんでも、わかる場所にあるの？」

「そうそう、家から出たらもう看板が見えるからね～」

「そういうや来る途中に見かけた氣がするな…わかつた、何買つてきたらしい？」

そして俺は二人の注文を聞いて、さっさとコンビニへと向かつてつ

た…。

コンビニまでの距離はルゼフィアの言うとおりさほど遠くはなかつた、部屋に来る途中で看板を見かけたこともあって俺はまっすぐコンビニの方へと歩いていき、店内でいろいろと商品を見て回る。ルゼフィアとファリニスに頼まれた弁当を買って、俺も菓子パンを一つ二つとカゴの中に入れて会計をする。

「1340円になります」

「じゃあ・・・2000円からで」

ポケットから裸のままの紙幣を二枚取り出して、レジのカウンターにスッと置く。

淀みなく店員が会計をして、お釣りを受け取ったあとに袋の中に入った商品を持って俺はコンビニから出た。

ピチヤ…

「…ん？」

なにかが、聞こえた

それは水の音のような、でもただの水ではないような…すこし粘ついたような音だ。

一瞬だつたので空耳か？と俺は少しだけ辺りを見渡してみる。

ピチャ：

「！」

今度ははつきり聞こえた、周りに走る車の音が少しだけ止んでいて方向もわかる。

ルゼフィアの部屋に行つた時よりも時間が経つていてあたりが次第に暗くなっているが、音を頼りにその方向に目をやる。

「なにもない…か？」

ピチャ：

いや確かに聞こえる…雨音とはまた違う、不吉な予感のする音だ。

心臓がバクバクと音を体中に響かせる…その感覚は、いつかの思念集合体と戦つた時のような命の危険を味わつた時の感覚と少し似ている。

(ファリニスを呼ぶか？いや、でも…)

脳裏に足を怪我したファリニスの姿が思い出される、玄関口では軽く歩けるようにはなつていたみたいだが…それでも心配だ。わざわざ怪我をしている彼女を強引に連れて来ても、いいのだろうか？

(音の正体を突き止めよう…それから、呼ぶか決めればいい)

俺は音のする方へと、歩いて行つた。

その頃のルゼフィアの部屋

「お、なにそれ？」

「レポートだよ、私が思念集合体との遭遇して起こった出来事も細かくこれに書いておきたくて…」

「ふうん…マメだなあ、あたしそういうの苦手でさ」

カリカリカリカリ…（レポートを書く音）

「思つたんだけど、ファリニスってなんでセグレトには敬語なの？」

「えつ？ どうしてつて…」

「あたしには敬語使わずに喋れてるし、セグレトだつてファリニスには敬語使わないし、ファリニスも普通にため口で話しちゃえば？」

「ええつと…なんていうか、その…」

もじもじとするファリニス

「男の人の前だと、なんだか緊張しちやつて…」

(「この可愛いな…」)

ひとり、モジモジするファリニスを見て心の中でニマニマしてるルゼフィアだった。

第22話

〈今日はグロテスクな表現を多く含みます、閲覧の際はご注意ください〉

買い出しの帰り途中、不思議な水音を聞いた俺は思念集合体との何らかの関係性を探るために、その音のする方へ向かっていた。

日はすでに落ちていて周りは街灯なしでは見えないほどに暗い、明かりを何にも持たない俺は音でしか進む道を決められない。

ピチャ…

だが進むにつれてその音は最初の時よりもはつきりと、そして明瞭に聞こえる。

雨も降つていないので水たまりもできないだろう、この音には何かある…俺はそう思つていた
やがて音を頼りに進むと、二つのマンションの間に広い路地裏への入口があつた。

「…」から聽こえてくる

買い物の袋を持ったまま、俺はその路地裏を恐る恐る覗いた。

ビチャ…

そこで聞こえてきたのは明らかに、ただの水とは違う音だった。

：俺の脳裏に嫌な予感が少しそぎる、以前遭遇した思念集合体の姿形：背筋に悪寒が走る、進んではいけない気もする、第六感が警鐘を鳴らしている氣さえした。

（やつぱり、ファリニス達を呼んで—）

その時だつた

俺の頭上から明かりが灯る、傍らにあつたマンション利用者のための街灯だ。

調子が悪く壊れていて、今まで明かりを灯していなかつたが：俺にとつては嫌なタイミングで、光を運んできた。

その街灯の光がマンションの路地裏を ＜照らしてしまつた＞

明かりの着いた先に広がつて一番に目に付いたのは、＜赤＞だつた。

俺の体が二人並んで通れるほどに広い路地裏への入口は真っ赤に染まっている、壁には投げつけられたかのようになにかの物体が張り付いていて、やはり赤く染まっている。

その赤い液体がなんであるか、俺の頭の中にこの街で起こった事件のことを思い出す前に、その答えが転がっている。

腕だ

綺麗に切り取られたその断面が網膜に焼き付く、ごろりと転がつたそれには自身の体から流れたであろう血液が色ごくこびりついている。

「なんだ…よ、これ…」

ぐちや…と奇怪な音が、奥から聞こえた

明かりは付いたまま、暗闇に目もなれているこの状況なら、奥に目をやるだけで見えるはず…でも、見たくない

だが…音がするたび、俺は俺自身の中にある好奇心が疼いているのがわかつた。

恐怖の根源がそこにある、この狂った景色の奥を、俺は見たがつている…そう、俺は目を奥に向けた。

「！」

そこにいたのは思念集合体じゃなかつた

人だ

もしかしてこの事件の被害者か？
偶然にも生き残つていた？

いい方向へと必死に考えた、目の前の惨状を見て俺は冷静さを欠いていたのかもしれない。

「だ…大丈夫ですか!?」

俺は駆け寄り、声をかけながらその人の肩に手を置く。
その時に、ヌルツと嫌な感触がする…だがそんなこと気にしていら

れない、と俺は気持ちの悪い感覺を無視した。

その後、その人が俺の方向に顔を向けた。

「…ウツ!」

その顔は

ひどく生氣のない、灰色をしている血の氣の抜けたような氣味の悪い顔色だつた。

明かりで確認できた、その方も胴も顔も、血しぶきを体全体で受けたように真つ赤。

直視するのもできないほどにグロテスクな存在に、俺は思わず反応して2、3歩身を引く

…つもりだつたが、力がうまく入らずに尻餅をついてしまう。

「…ウフフ」

こんな暗闇なのに

その人が笑つてゐるのがわかつた

だがその笑顔は、赤くて黒くて

この世のものとは思えないほどの狂気に溢れている、そんな禍々しい笑顔

その頃のルゼフィアの部屋

「ん～…お腹すいたあ」

「我慢だよ、セグレトさんもうすぐ帰つてくるから」

「ファリニスお菓子とかない？ちよつとだけちよつとだけえ…」

「え？うーん…カバンの中にあるかも」

「ほんと!? よつしや探すぞー！」

バラバラとカバンの中身をぶちまける

「ふんふーん…お？」

「どう？まだなにか残つてたかな？」

ルゼフィアの方を見ずにレポート書きに集中

「ねえ、この瓶に入つてるのって、さつき話してた思念集合体のかけら
？」

「うん、そのかけら動いてるけどあんまり気にしないでね」

「そう？なんかすつごい暴れてるけど」

「…え？」

同時刻、路地裏

ニタニタしたままそいつが近寄つてくる、灰色の体と赤い血の色が俺の恐怖心をさらに増長させる。

そして今まで気がつかなかつたが、その片手には大きな鎌が…まるで死神の持つているような大きな鎌が、いつのまにか握られていた。

「嬉しいわあ…また、増えた…」

その鎌も赤く染まつていて、刃になにかの物体がついていたがあまり深く考えていられない…なによりも俺の目線は、その人の…彼女の

顔から離れなかつた。

「う……あ、あんたが……あんたが、やつたのかよ……？」

「……ああ、この子達のことかしらあ……」

足元に転がっていた肉片を鎌でなでるように触れる、その動きは愛おしさのような……まるで子供がおもちゃに触れるように、遊ぶようにそして鎌でその肉片を潰す、グチュリとおかしな音がしてその肉片が弾けてあたりに新しい血を撒き散らす、その血が俺の体に飛んで服に染み付く。

「ああ……可愛い……ウフフ、ヒ……」

「く、狂つてる……」

逃げたい、この状況はまずい！

直接的に目の前にやばい奴がいる、殺されるかもしけない、俺はすぐにも立ち上がり逃げたかった。

しかしここれまでの惨状を見たせいか足腰に力が入らない、まるで足をなにか見えないものに掴まれているように下半身が地面から離れない

「あなたも、あの子達の仲間にあげる…より一層、可愛く…フフ」

体と同じほどの大きさの鎌を片手で高く振り上げながら、彼女はそう言つた。

間違いなく殺す気だ、俺のことを周りのこいつらみたいに…跡形もなく

「うわああああああつ!!」

バチツ!

「アツ!?

一瞬の激しい音と共に、目の前に立っていた彼女が光のような物体をくらつて後ろに倒れ込む。

俺は何が起こったのか分からずにその光景を見たまま硬直していった、そしてその後に後ろから誰かの駆け寄る音が聞こえる。

「セグレト!・あんた無事!?」

足音の次に声が、ルゼフイアの慌てたような声だった。

血にまみれたこの場所を見ながら少しうろたえているようだが、まっすぐ俺の方に向かってくる…その背中にファリニースの姿も見えた。

「これは…ひどい、ですね」

「ルゼフイアにファリニースも…どうして、ここに…」

ファリニースが瓶の中で思念集合体が凄まじく反応していたこと、それを見てから嫌な予感がして俺を探しに来たことを話した。

ルゼフイアの住んでる場所からここがそう遠くなく、駆けつけるのに時間はかかるなかつたらしい…

そして俺から、この路地裏の入口に来てから起こつたことを事細かく話す。

「つてことは、あいつが犯人か！あたしの求めてた！」

「多分、いや…間違いないと思う、すぐに捕まえたほうがいい」

「…セグレトさん」

「那人、どこにいるんですか？」

「え？」

俺はすぐに後ろを振り返った

いない

さつき倒れたばかりの彼女がいなくなっていた、体程の大きさもあつた鎌も消えていた。

そんなばかりと、俺は辺りを見渡してみてもあたりには血だまりしかない：

消えたのか、本当に？

そのとき、壊れても一時的についていた街灯の明かりがふつと：消

えた

あたりに光源がなく、街灯の光を見ていた俺たちは急に訪れた暗闇に困惑してしまう。

「また増えた…」

「！」

悪魔のような声が、ひつそりと

俺たちの背後から聞こえた